第 6 巻

成寿

SEIJU

1987 春季号

横浜 善光寺刊

寒中御見舞申上げます

梅は寒さを経て佳香を放つとの句がありますがこの寒さにこそ人間成長の要因のあることを思えば寒さもまた有難いことであります

さて成寿第六号をお届けします

実は新年早々にお送りするつもりでしたが御別刷の手違いで遅延しました

お御礼さまで蜀山の梅外派遣事業もますます軌道に乗りましたこと誠慶でお祈り申げます

まずは寸筆もって御挨拶とします　合掌

昭和六十二年　月　日

善光寺住職　黒田大圓（武志）

檀徒の皆様

雙要（ひとくみ）

母も　父も
はた　親族（したしき）も
たとえいかなる
たすけをなすとも
正しき心もて作（な）せる
さいわい　にくまれるもの
誰かなしえん

「法句経」

成寿

SEIJU

1987 春季号

善光寺釈迦殿内陣

須弥壇壇上　三千仏を背に
お釈迦様がお坐りになっておられる
文殊・普賢　左右にはべり
お坐りつづけて二千年
激しく揺れ動く限実世界の
微妙なバランスの秘密をここに見る

耳を澄ますと
仏天蓋より降る黄金の光の雨の中
新たな仏法の音楽が響いてくる
釈迦牟尼仏を太陽に
涅槃へ導くシンフォニーの最初の音が
響いてくる

さらに御加護を祈念する

山主　置田大圓

当寺を開創して十八年目を迎えます。ゼロから出発して今日の隆昌を招来し得たのは、仏天の加護のもと、檀信徒の皆様の絶大なる御協力御援助の賜と常に感謝しております。

釈迦殿は、脇仏を制作勧請して一応整備されましたので、今年は不動殿に矜羯羅（こんがら）、制吒迦（せいたか）の二童子をお迎えして、本尊不動明王がいよいよ威光を増加（ぞうぎや）し衆生利済（しゅじょうりさい）の実を挙げてくださるよう祈願申し上げる所存であります。

不動明王の本体は大日如来であります。大日如来は、普通、一般の衆生を救済なさるときには般若菩薩の姿をとって現れるのですが、通常の説法では救いがたいような剛強難化（ごうきょうなんげ）の衆生に対しては忿怒形（ふんぬぎょう）の不動明王となって現れるのであります。勝手気儘なものの多い今日を救ってくださるのは生に不動明王であります。

不動明王は、三十六童子、八大童子等の眷属を従えております。なかでも、矜羯羅、制吒迦の二童子は常に不動明王の左右にはべり、不動明王の命に従い忠実にはげむものであります。経文には、「聖無動の眷属、三十六童子、各々千万童を領す、本誓悲願の故に、4万億の悪鬼　行人を繞乱せん時、この童子の名を誦すれば、皆ことごとく退散し去る、若し苦厄の難あらん、咀呪病患のものは、当に童子の名を呼ぶべし　須臾にして吉祥を得ん　恭敬礼拝するものの　左右を離れず　影の形に随うが如く護り長寿の益を獲得せしむ」

これまで当寺をお護りくだされ、今日の盛栄にまで導いてくださった不動明王に対し、矜羯羅童子、制吒迦童子を勧請するのに十八年を要したことは、正に遅きに失した感がありますが、おゆるしいただき、今後一層の御加護を祈念する次第であります。

檀信徒の皆様方も、「恭敬礼拝するものの左右を離れず、影の形に随うがごとく護り、長寿の益を獲得せしむ」というみ教えを信じ、いよいよ恭敬礼拝に御精進あらんことをお願い致します。

タイより帰る

梅田尚平 師
（浄土宗）

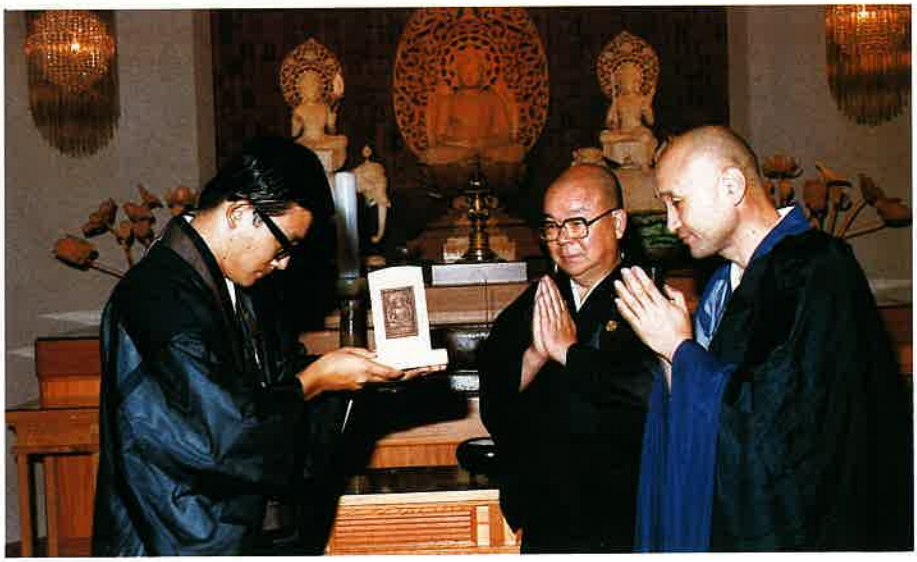
佐藤俊明
常務理事

黒田大圓
理事長

田中智誠 師
（黄檗宗）

第１回留学僧

記念の楯を授与された田中智誠師



同じく梅田尚平師

ZEN COMMUNITY of NEW YORK

GREYSTON

ZEN COMMUNITY OF NEW YORK

SEMINARY
690 West 247th Street
Riverdale, N.Y. 10471
212-548-4315

BAKERY and ZCNY OFFICE
114 Woodworth Avenue
Yonkers, N.Y. 10701
914-375-1510

禅 コミュニティ オブ ニューヨーク
禅 真 寺
（グレイストン セミナリーともいう）

センターの朝のおつとめ風景

ピーターマトソン師（小説家）
佛真寺主管 前角博雄老師　禅真寺主管 グラスマン徹玄師

国安大智師と
グラスマン徹玄師

禅真寺全景

禅真寺裏庭（雪景色）

禅真寺禅堂

人を植える

〝たとえ世界の終末が明日であっても
自分は今日りんごの木を植える〟（ゲオルギュー）

赤間　義徳

近づく東海大地震
チェルノブイリ原発事故
ボタン一つの世界終末戦争
・・・・・　　・・・・・
どこに
確実な〈明日〉があるのか
世界は　日増しに
絶望に汚染され

私たちの足もとは
絶えず　くずれていく

ここに
黒田大圓方丈様は
正伝の仏法を普及する信念にみなぎり
海外留学僧を世界各地に派遣して
虚無の風が吹く魂の荒野に
〈今日〉　人を植える

そこに
闇をおしのけて
太陽の最初の光がとどく
初転法輪の
最初のお声がように。

善光寺収蔵品

一葉観音　　萩原雅春作

涅　槃　図（明和元年作）

地蔵菩薩

雙　要(ひとくみ)　「法句経」

カラー■善光寺釈迦殿内陣……2
あいさつ■さらに御加護を祈念する……4
カラー第一回留学僧タイより帰る……6
■禅コミュニティオブニューヨーク……8
詩■人を植える……赤間　義徳　12
カラー■善光寺収蔵品……14
特別寄稿■留学の決心……中村　元　18
法話■お釈迦さまの涅槃……黒田　大圓　20
座談会■人様のために働かせていただく……28
レポート■アメリカ・禅・センター報告……河内　義宣　40
論文■禅の国際化と私の役割……国安　大智　46
仏の国スリランカに学ぶ……中野　良教　49
留学記■プーナに学ぶ……阿部　慈園　52
魂の灯りの宗教の力強さ……保坂　俊司　57
エッセイ■禅と衣食住(二)……東　隆真　61
■私の考える大祖道と下化衆生……黒田　大圓　65
説話二つの月……佐藤　俊明　68
■大般若会拈香法語……佐藤　俊明　72
善光寺だより■……74
詩■観世音声を限りに……遠藤　太禅

編集後記

カット・題字●伊藤三喜庵
□絵・写真●五十嵐千彦

●特別寄稿

留学の決心

中村　元
（東京大学名誉教授
東方学院長）

外国へ留学生を送るということは、大変なことであり、それは政府とか大教団のみのなし得たことであるが、善光寺さまが独立に海外に留学生を送られることになったのは、感嘆すべきことである。

まさに今昔の感に堪えない。

今からほぼ四十年前には、日本が進駐軍の支配下にあったために、外国留学など思いもよらぬことであった。月の世界へ行くようなものであった。

ただ外国から招待を受けて、しかも外国から資金を与えられた人々のみが、外国へ出かけることができた。

わたしたちの仲間で、アジア諸国へ留学することができた最初の人は、高崎直道君であったと思う。わたくしはその必要を痛感し、インド大使館と折衝していたが、ついに先方のインド政府から留学資金を給せられることになった。

喜びのあまり、わたくしは故・宇井伯寿先生を、お訪ねしたときに報告した。「今度高崎直道君をインドへ送ることになりました。」

ところが先生は驚いて言われた。――「なにインドへ送るとな！　それは、容易ならぬことだ。気をつけねばならぬ。なになに君はインドへ行って重病になった。なになに君は死んで帰って来た！　気をつけい。」

確かに高崎君自身は、容易ならぬことに気づいていた。現夫人と婚約中であったにもかかわらず、結婚をのばして、昭和二十九年に単身プーナへおもむいた。「万一の場合を慮って」と言われた。悲壮な覚悟である。

インドの文化都市プーナでの足かけ四年の研学はみごとに結実した。その学位論文「究竟一乗宝性論の研究」を、審査員であったイタリアの碩学トゥッチ博士が高く評価した。その結果、同博士の主宰するイタリア極東中東研究所叢書の一冊として立派に刊行された。戦後の邦人の大乗仏典の研究が外国文で刊行され、このように国際的に高い評価を受けた例は、稀である。

その後高崎直道博士が学界の重鎮として諸国の学者からたよられていることは、周知の事実であるが、それは単なる偶然の所産ではない。覚悟を決めてかかったその態度が実ったのである。

今日は、戦争直後とはすっかり事情が変わっているので、一概に言うことはできないが、これから留学する人々がただ「遊びに行く」だけのためならば、もはや何も言うことはない。しかし、近く東大を定年退職する高崎博士の栄誉と信望にあやかりたいと思うならば、覚悟を決めて精進されむことを期待し、先人の行実の一端を紹介した次第である。

●法話

お釈迦さまの涅槃

黒田大圓
（武志）

お釈迦さまがお亡くなりになった二月十五日を、私たち仏教徒は「涅槃会」という行事を設けてその日をなつかしみます。

今年も、その涅槃会が近づいてまいりました。お釈迦さまの晩年がどのようなものだったのか、そして、最後にどんな説法をなされたのかを思い出して、みなさんと一緒に涅槃会の供養をしたいと思います。

お釈迦さまの晩年については、「大般涅槃経」にくわしく記されております。この「大般涅槃経」は、お釈迦さまが霊鷲山を下られて最後の遊行に出られるところからはじまって、クシナーラという村で涅槃を迎えられるまでの、長くつらい旅に沿って書かれております。

お釈迦さまの晩年には、いくつかの悲しい出来事がありました。たとえお釈迦さまであろうと、そのおもいには一抹の淋しさがあられたであろうと思います。同族のデーヴァダッタが僧伽の分裂を企てたこともそのひとつでありましょう。それを未然に防いでくれたサーリプッタ（舎利弗）とモッガラーナ（目健連）はその後間もなく相ついで師に先立って逝ってしまわれ

ました。

最も頼りとしていた愛弟子を相ついで見送らねばならなかったお釈迦さまの悲しみは、想像に難くありません。しかし、仏陀となり法を説く者の生き方として、悲しみに自己を忘れるようなおろかな事はもちろんありませんでした。

サーリプッタの死の報せに、侍者のアーナンダ（阿難陀）があわてふためき、取り乱してお釈迦さまにその事を告げますと、お釈迦さまはいつも通りの静かな態度でこう申されました。

「アーナンダよ、いつも私が言っているように、愛する者とはいつか別れなければならぬ。この世のことは一つとして変化しないものはない」

お釈迦さまの悲しみは、おそらく誰よりも深かったろうと思います。悟りを得られない人間と違うところはといえば、ただ、取り乱さないというだけのことかもしれません。

「大いなる枝はいま枯れて落ちた。しかし大樹はなお堅固に生きつづけるであろう。」

このあとお釈迦さまは、アーナンダに向かって、有名な「自帰依（じきえ）・法帰依（ほうきえ）」を説かれました。

「自己を洲とし、自己を依り拠として他人を依り拠とせず、法を依り拠として他を依り拠としてはならない。」

私たち仏教徒は、この一句をとても大切にします。人生において洲たりうるものは、「よく整えられし自己」以外なく、自己をよく整えるためには法によるほかはありません。

この教えは、お釈迦さまの究極の教えであろうと思います。

しかし、サーリプッタとモッガラーナのお二人が亡くなられてからは、お釈迦さまの言葉には悲しいひびきが流れはじめます。

布薩（ふさつ）という儀式に出席されたお釈迦さまはそこに集う比丘たちにこう申されました。

「比丘たちよ、サーリプッタとモッガラーナがいな

なってから、わたしにはこの衆会は空虚になってしまったような気がする。いまはあの二人の想い出だけが私を支えてくれる。」〈雑阿含経〉

初期の経典にはこのように、神聖化された仏陀釈尊ではなく、人間としてのお釈迦さまを素直に書き記してあります。そして自らにも言い聞かせるように、さきにアーナンダに説いた「自帰依・法帰依」のおしえを説かれました。

すでに八十の齢に達しておられたお釈迦さまは、侍者のアーナンダにこう語りかけられました。

「アーナンダよ、わたしは老い衰えた。老齢すでに八十に及んだ、たとえば古い車は革紐のたすけによってやっと動くことができるが、わたしのからだもまた、革紐のたすけによってやっと動いているようなものだ」

その老躰にムチ打つように、「アーナンダよ、アンバラッティカーへ行こう」と申されるのです。

こうしてお釈迦さまの最後の伝道の旅がはじまります。どこを最終目的地にされていたのかは知るよしも

ありませんが、お亡くなりになったクシナーラの数キロ近くに、故郷であるカピラバッツがあることを思うと、かつて捨てた生まれ故郷を、一度訪れたいと願われたのかもしれません。しかし、それはついに実現されずにおわりました。

アンバラッティカーからナーランダへ、そしてパトナへと旅を続けられました。

パトナという町からガンジス河を渡って、ヴァイサリという村へ行かれるのですが、ずっと見送ってきた人達とは、ガンジス河の畔で別れなければなりません。今も現地では、ゴータマの渡しと呼んでいる舟着場にむかってお釈迦さまはアーナンダにかかえられるようにとぼとぼと歩いて行かれます。送る人はみな一様に、もうこの師に会うことはできまいと悲しみに心ふさがれていたに違いないと思うのです。このお姿を心に焼きつけて、決して忘れまいと、涙をこらえながら目ばたきさえ惜しむ人たちの姿が想像できます。

渡場を渡るお釈迦さまは、往年のようなきらめく生気はかけらもなく、その老いさらばえた老軀にまとうものは、うす汚れた壊色（えじき）の衣のみ…。全くの無一物、無位の師が、なぜこうも尊いのか。

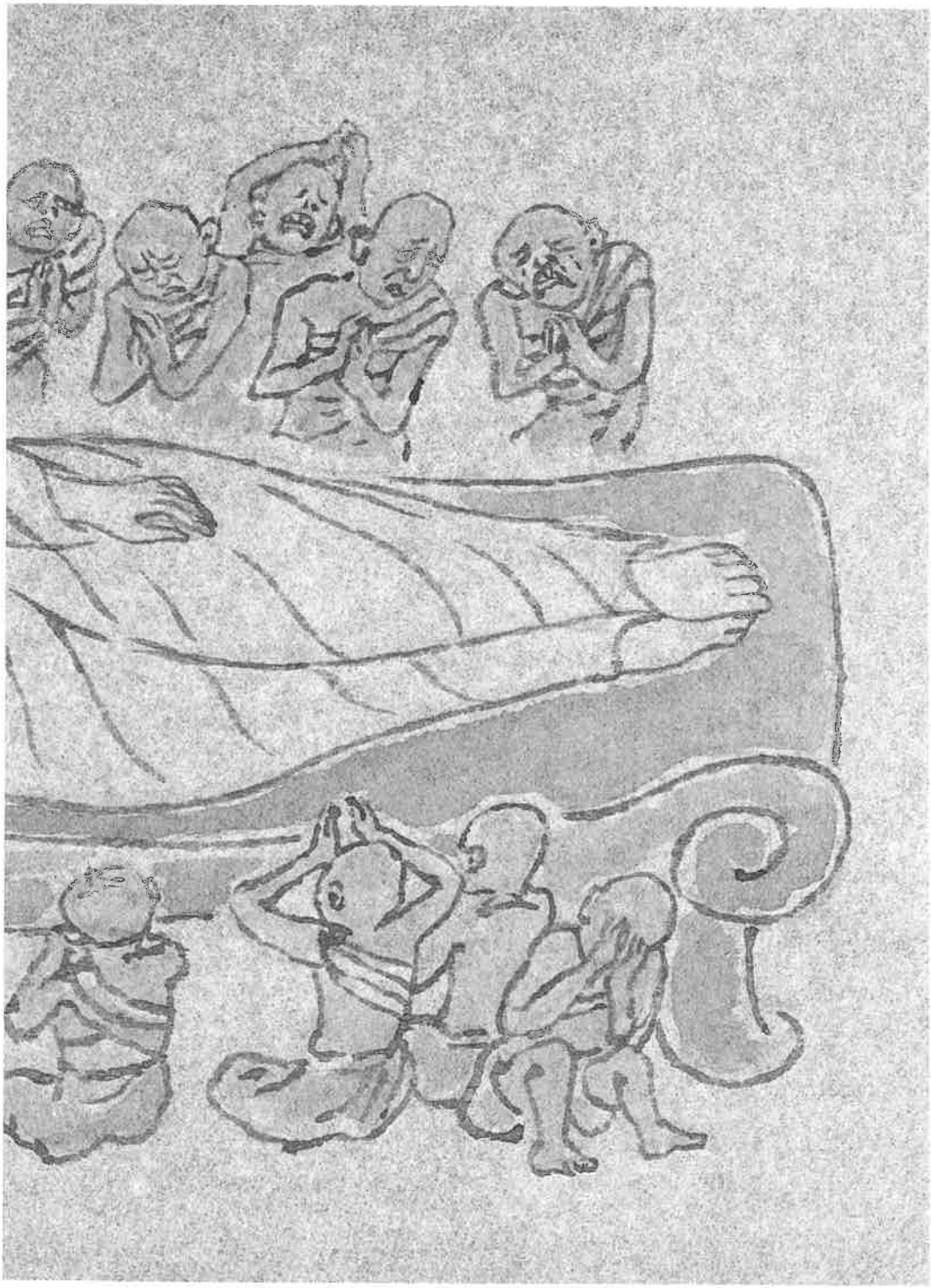
二千五百年経た私たちが今もなお恋い慕い、尊敬してやまないお釈迦さまは、まぎれもなく私たちと同じ一人の人間であります。

渡場の情景は、老いた父を見るように悲しくなつかしく、胸をしめつけます。

ガンジスを渡ったヴァイサリの郊外で、お釈迦さまは病を得てしまわれましたが、雨期が終わる頃には、ようやく身体も回復しました。

ヴァイサリは、半世紀にわたる伝道の間に何度となく往き来したなつかしい町でありました。そのヴァイサリを去る時、お釈迦さまは、ゆっくりと象のようにふり返って「アーナンダよ、わたしがヴァイサリを眺めるのもこれが最後であろう」と申されたと書かれてあります。

その後、パーヴァーという町でチュンダという鍛冶



涅槃図
沙門三定庵

屋から供養を受けたお釈迦さまは、その食事が原因で死の病にかかってしまわれました。驚き自責しつつはせ参じたチュンダに、お釈迦さまはこう語られました。

「チュンダよ、二つの布施があって最もその功徳が大きい。一つは如来が悟りを開いたその最初になされた布施である。いま一つは如来が涅槃に入るときになされた最後の布施である。汝の布施は最も尊い功徳の布施である。」

この言葉ほど限りなく深い思いやりに満ちた言葉を私は知りません。チュンダは身を投げ出して号泣し、そのまま出家しました。

パーヴァーを発ち、涅槃の地クシナーラへ向かわれる途中も、お釈迦さまの病状は次第に悪化していきました。

きのこの食を召したまい
重き病を得たまいて
腹くだりつつ世尊はいう
いざクシナーラへわれは行かんと

経典には何の粉飾もなく、ありのままの素朴さで記されてあります。

この生々しい記述は思わず胸をつかれるような悲しみを込めて、なつかしく私たちに迫ってきます。

一行がクシナーラ城のみえる沙羅の林に着いた時、お釈迦さまはアーナンダに申されました。

「アーナンダよ、私は疲れた。横になりたい。あの沙羅の双樹の間に床を敷いておくれ。」

薄い座具の下は、木の根がデコボコとして決して心地よい死の床とはいえなかったでしょう。お釈迦さまは敷かれた布の上に頭を北に向けて右脇を下に、足を重ねて横になられました。

涅槃にお入りになるお釈迦さまを、もうお騒がせしてはならないと断るアーナンダを制して、お釈迦さまは百二十歳の老哲人を最後の弟子として受け入れ法を説かれました。最も長い間お釈迦さまに仕えていたアーナンダはいまだ悟り得ず、悲しみに耐えきれず泣きながらお釈迦さまに取りすがりました。

「私はいまだ阿羅漢の悟りを得られません。いま師が涅槃に入ってしまわれたなら、私に師はありません、私はどうやって悟りに入ることができるのですか。」

その時お釈迦さまは、さきの「自帰依・法帰依」を繰り返し説かれ、つづけて申されました。

「アーナンダよ、憂うることはない、汝は如来に仕えること二五年、その間欠くることなくよく給仕してくれた。その功徳により、汝は間もなく偉大な悟りを開くであろう。アーナンダよ、憂うることはない。」

限りなくやさしい師のことばでありました。また、御子であるラーフラには、父として次のような言葉をかけておられます。

「ラーフラよ、憂い悲しみ心を乱してはならぬ。汝は子としてなすべきことをなし終え、我もまた父としてなすべきことを終わった。ラーフラよ、一切諸法は無常である。この無常をはなれて解脱を得、常楽に住するのが我が教えである。」

集った比丘たちに真理の法を残しゆくことを伝えて、お釈迦さまは静かに涅槃に入られたのです。

お釈迦さまの晩年は、決して平和で穏やかな日々ではありませんでした。むしろ、悲しみと肉体的苦痛の連続だったといえるかもしれません。それでも一日も休むことなく伝道を続けられたのは、ただ仏法のためでありました。

弟子たちへの、そして後世の私たちへの限りない愛情のためでありました。

インドという風土の中で、八十歳という高齢の体を徒歩で遊行するという苛酷な旅をし続けられたお釈迦さまの果てしないほどに深い慈悲の心に、私たちは包まれていることを忘れてはなりません。苦しみ悩む私たちをいつも見守っていてくださるお釈迦さまの、深い悲しみを湛えた瞳の色と——おこたらずにつとめよ——との最後のお言葉を思い起こしてください。

二月十五日は涅槃会です。みなさんひとりひとりが、お釈迦さまのお徳を慕って生きていきたいものです。

●座談会

善光寺海外留学僧派遣育英会・第一回総会

人様のために働かせていただく

《出　席　者》

佐藤　俊明（司会）

黒田　大圓

田中　智誠

安井　隆同

国安　大智

梅田　尚平

《発言順・敬称略》

一昨年に発足した善光寺海外留学僧派遣育英会は、昨年春、黄檗宗・田中智誠師、浄土宗・梅田尚平師をタイ国ワット・パクナムに派遣し、秋には、アメリカ留学僧派遣の事前準備のため、国安大智師をニューヨーク禅センターに送り、今年は、カルカッタ大学大学院士過程在学中の浄土宗・安井隆同師をインド留学僧に決定し、曹洞宗・河内義宣師をロスアンゼルス禅センターに、曹洞宗・中野良教師をスリランカケラニア大学大学院研究所員に派遣しました。

安井・国安の両師が休暇で帰国されたので、去る八月二十八日、在米中の河内師と中野師を除く四人が善光寺に会し、第一回総会を開催する機会を設けました。当日の座談会の概要は次のとおりです。

佐藤俊明老師

佐藤　本日は、第一回の総会を開くことができ、タイ、インド、アメリカへ留学された四人の皆さんにお集まりいただくことができたことは大変意義深いことだと思います。皆様方それぞれの経験をここでお聞きできることを楽しみにしております。

方丈　ではまず、タイに行かれた田中君よりお話をうかがいたいと思います。

田中　この育英会に応募し、幸いにもバンコクの寺で修行させていただきました。タイ国、またはビルマな

どの南方仏教の姿というのはまだあまり日本に知られていないようなのですが、その違った姿に出会い、感銘を受けたその経験を、今後生かしてゆきたいと思います。

方丈　参考になったことを聞かせていただけますか。

黒田大圓方丈

田中　最初は右も左もわからない状態で厳しい戒律に従った生活に入りこんだのですが、生活してゆくうちに、生活形態が自分自身のものとなってゆきました。そしてまた、毎朝托鉢に出かけることによって、小乗の比丘のあり方を、自分の実践を通して見ることができたと思います。こういった経験をどう生かしてゆくか、ということが自分に課せられた課題だと感じております。

方丈　安井君はインドを数回訪れていらっしゃるわけですが、そのインドとのつき合いの中で、何か心に残ったこと、日本の人々にぜひ伝えたいと思うことなどありましたらお聞かせ願いたいのですが。

安井　私自身、日本の仏教を学び、その中で歩ませていただいているわけですが、日本の仏教というのはどうも、学が栄えて道が滅びるきわみにあるのではないか、という気がするのです。そこで私は、インドではお釈迦様が歩まれた道を私自身も自分の足で歩くことによって、お釈迦様が何を考えながらどのような気持ちで歩まれたのかを感じとろうとしたわけです。その旅の途中、貧しい村で一夜の宿をとった時のことですが、私を泊めてくれた家の母親が病気だと言うんです。

そして、私に、日本から来た坊さんならば病気がなおるように祈りをささげてくれ、というのです。私は仏教の坊主ですよ、と言うと、いや、それでもよいから、日本のお経でも何でもよいからあげてくれというので、般若心経を心からあげさせていただきました。それを家族のみんなは非常に喜んでくれたのですが、そこに私は宗派を越えた祈りというものを見たように思います。この祈りというのは、彼らの日日の生活の中に深く根をおろしており、朝日が昇る時、井戸の周囲をまわりながら、また夕暮時に焚かれる香とともに祈りがささげられるのです。貧しい食事の前にも、少ない穀物を小鳥のために庭にまいて祈りをささげる彼らの姿に、何教、何宗であるとかいうことを超えた祈りの原点を見た気がします。村村とをまわりながら、そういった、文字も読めない人びとの、人間の力の及ばない、人間の力を超えたもの、神とか仏とかいったものに対する真摯な祈りの姿に非常に心をうたれ、おしえられた気がします。

方丈　国安君は、アメリカでどのようなことをお感じになりましたか。

国安　私の経験は、ニューヨークの限られたコミュニティの中のものであり、その視点からしか話すことはできませんけれども、アメリカで今、「禅」というのは非常に広まっています。またニューヨークというところは、中国、タイをはじめとする世界の仏教が集まっているところで、それに加えてキリスト教・ユダヤ教などが、ごちゃごちゃに存在しているわけなのです。ニューヨークだけでも、メディテーション・センターは何百とあるのですが、日本の禅に関して言えば、修行の第一段階を終えられたユダヤ系アメリカ人の方がコミュニティ形式の禅の修行道場をつくられました。

方丈　コミュニティと言いますと、共同生活の場というようなものですね。

国安　はい。その中では一緒に生活するということが本当に大切に考えられており、日本人が誤解をしていたのではないかと感じることもたくさんありました。

方丈　確かに異なる文化・宗教を持っておられる外国の方々に出会って、日本人であり、仏教徒である私どもが、私達の本来あるべき姿に気づかされることはありますね。そういう、出会いの中で感銘を受けたというような経験が何かございましたか。

田中　そうですね。戒律を守るということに関して、「走ってはいけない」という言葉がありますが、ある時バンコクで所要のために市内循環バスを利用した時、ちょうど雨が降っておりまして、私は停留所でおりてから雨やどりができそうな場所までつい小走りになってしまったのです。しかしタイの坊さんたちは、雨が止むまでバスを降りようとせず、もう一度循環するバスにそのまま乗っていたということがありましたね。

田中智誠師

方丈　そういう姿勢というのは「歩きながらも動中に静あり」ということ、つまり歩いてはいるが、心は動いていないのだ、ということにもつながるかも知れませんね。今までのお話を聞いておりますと、タイ・インド・アメリカの仏教僧、または一般の人びとの姿勢から、我々が学ぶべきところは大いにあるようです。

修行の在り方

では私たちの修行のあり方ということに関しては、どのような心がけでのぞんだらよいか、理想的な修行とはどんなものか、お考えのところがありましたらお聞かせいただきたいと思うのですが。

安井　仏教の修行にもさまざまあると思います。その中でも型にはまった修行と型のはずれた修行と分ける

ことができるのではないかと思うのですが、この二つはどちらもそれぞれ必要であり重要でありましょう。また、人と違った、変わったことをやらせていただくのも大切な修行ですけれど、自分が現在ある中で、自分に与えられたことを精一杯やらせていただくというのが一番の修行だと思うんです。人様のために働かせていただく、仕事をやらせていただく、という姿勢が非常に大切な気がしますし、それが私自身の修行であると考えております。

安井隆同師

国安　私も基本的には、安井さんがおっしゃられたように働かせていただく、ということが大切だと思います。私の体験したコミュニティでの生活の中に、ベーカリー、パン製造ということが含まれていたのですが、これはワークプラクティス（作業の実践）とはどういうことか、人生とはどういうことか、また禅とはどういうことかという二つの関連するものとしてとらえ、みんなで力を合わせることの大切さをくり返しくり返しミーティングでも強調していましたね。この毎日働くということは、もうけとは関係なく、また休みたい時には自由に休んでよいわけですが、とにかく日日働くということを通して、禅とは何かを体験的に把んでゆくという修行のひとつのあり方だったわけです。

佐藤　つまり作務、普請ですね。「一日作されば一日食わず」これが今アメリカに生きている。

梅田　タイの小乗仏教の戒律の厳しさというのは、それを形式として守るだけでも最初は大変でしたけれど、タイの国内にいる時は周囲からそれを守らせてくれる

という雰囲気があるわけです。ところがタイの外に出ると、今度は自分から守らなくてはならないわけで、そこでは戒律に対する自分のしっかりした態度が求められるのだと思いました。

方丈　アメリカにおいて作務を重点的にやっているというお話でしたが、これは中国のと非常に似ていると思うんです。中国の禅との関係はどうでしたか。

国安　中国禅の道場もニューヨークにはたくさんありました。アメリカの禅道場の住職というのは、修行をしたアメリカ人である場合が多いのですが、その修行というのも、曹洞禅のみを修めるというよりも、中国禅、チベット仏教、大乗小乗などさまざまな要素をとり入れているようでした。それらのよいところをとり入れ、アメリカの文化や生活に適合させているのが禅コミュニティの生活の中にうかがえましたね。ですから、戒律や厳しさということも、長い歴史の中で形成された型にはまったものではなく、我々の考えているものとは多少異なるものとして理解されていたのではないかと思います。

国安大智師

二十一世紀の仏教

佐藤　釈尊の弟子たちが、釈尊が具合が悪いと聞いてクシナガラに来る途中、曼陀羅華を持ったバラモンに会い、釈尊が七日の前に亡くなったことを聞くわけです。異教徒の持った曼陀羅華（まんだらげ）が、どうして釈尊の死を告げる意味をもっているか。バラモンが釈尊の死をどうみているか、安井君おうかがいしたいんですが。

安井　まだ勉強不足でよくわからないのですけれど、その逸話に表現されていることは、現在のインドにおいても見られることだと思います。インドでは仏陀は聖者としてとらえられていますし、仏教はヒンドゥ教の一派であるとされています。ですから、何教徒であっても、求道者に対しては尊敬の念をこめてあつかいますし、そういった意味では異教徒に対する壁はとりはらわれているといってよいと思うのです。確かにヒンドゥ教徒とイスラム教徒の衝突ということはありますが、親子、兄弟でもけんかはするわけですから、いつもいがみあってるわけではないと、インドでの経験から感じたわけです。そのいい例が、カルカッタにおいての故インディラ・ガンジーの一周忌の法要だったと思うのです。この時は、私も日本の仏教僧として招かれたのですが、ここにはインドの全ての宗教、ヒンドゥ教、イスラム教、ジャイナ教、ゾロアスター教、シーク教、キリスト教の代表者たちが集まり、それぞれの教えに基づいた祈りをささげておりました。インディラ・ガンジーはシーク教徒に殺されたというのに、シーク教徒の僧も声高らかに祈りの言葉をささげておったのには驚きましたけれども、そこにこそ、宗派を越えた、インドの宗教の悠久の流れというものがあるような気がいたしました。

方丈　どうも日本はそれと比べると、宗派にこだわり、自分だけを認めさせようという意味が強いように思いますね。もっと大らかな気持ち、釈尊の気持ちを生かすということなしには、世界の平和などは達成されないでしょう

　では、二十一世紀に向けて、我々はどのようにしなければいけないか、ということをお聞かせ願いたいのですが、どうでしょう。

国安　今方丈様がおっしゃられたように、日本では仏教が宗派に分かれてしまっているという現状だと思うんです。しかし、アメリカでは、禅そのものとして受け入れられており、道元を勉強した人が日本に興味を持ち、日本に行ってみたいという気持ちでいるわけな

のです。そういうところから考えてみますとやはり宗派にこだわらない、また理論ではない人と人との関係を大切にしてゆく、ということは重要だとおもいますね。

田中　日本にもキリスト教の宣教師の方はたくさんいらっしゃるわけで、また最近カソリックと禅の間の交流も持たれているようです。カソリックの宣教師の方々は、仏教をとり入れるためにキリスト教のことばで学んでおられるようですが、これと同じことが、仏教僧にも必要ではないかと思うのです。サンスクリットの語源は、ギリシャ哲学にも通じますし、キリスト教について勉強する、ということも、これからの仏教の国際化においては必要なことになるのではないでしょうか。

方丈　宗派を越えての集まりということで世界宗教者会議などというものが開かれているようですが、これはどうも長たる方々だけが集っているだけで、本当の交流、国際、国内を含めての交流という意味ではまだ十分に機能を発揮していないと思うんですね。そこで我々としましても、さまざまな方々の御力添をたまわりながら、大変難しいことではあるんですが、将来に向けて、やはり宗祖を通して釈尊に還るという、世界がひとつになるという夢を持って、国外で得たことを生かしていただきたいと念ずる次第でございます。

抱負を語る

佐藤　方丈さんは前々から宗祖を通して釈尊に還れということを強調しておられ、またご自分もタイやアメリカで修行なさって、やはり海外に留学して視野を広げなくちゃいけないという認識をもってこの育英会をつくられたわけです。そこで、黄檗宗、浄土宗などの、宗門外の方が応募され派遣されたというのは、セクト主義にこり固まっている日本仏教界にとって大変よい結果だったんじゃなかろうかと思うんです。ですから、今後も、皆さんのご協力を得まして、宗派を越えた本当の仏教を善光寺から打ち樹ててゆこう、と理想に燃

えておりますので、皆様も海外で積まれたご研鑽をお役立て下さいますことを希望致します。

方丈　では最後にお一人ずつ今後の抱負を述べて頂きましょう。田中君、如何でしょうか。

田中　今の時期は、自分自身に投資する時代だということで、そのことを大切にしたいと思います。

梅田　日本は今非常に経済的にも恵まれておりますし人の考え方は、物質的なものより精神的なものへの移行があると思うんですけれど、国際的な向きを目指すということで、最終的には全世界の平和ということを目指して、力は小さくとも、自分自身も何らかの形で役に立ってゆきたいと思っております。

梅田尚平師

安井　私はインドで三年と少し学ばせていただき、来年の七月ぐらいには帰国の予定なのですが、私はこのインドでの三年、四年の経験によって何かまとまったことをしようとは全く考えておりません。ただ、今度日本に帰って来た時は、初めて仏教の門に立つというような気持ちで物事に対処したいと思っています。現在の段階は広大な荒れ地を耕したという状態で、日本に帰ってから何の種をまくか、そしてそれが二十年、三十年の後に一輪でも花が咲けば、それが善光寺さんへの恩返しになるのじゃないかと思っております。

国安　私は、まだまだ仏教についても、日本、海外についても勉強不足ですし、これからロンドンにも修行に行って参ります。一日一日を精一杯生き、自分を忘れることができたら最高だなと思います。

方丈　今日は皆様大変ありがとうございました。では

最後にご老師よりひと言お言葉をいただきたく存じます。

佐藤　幸いなことに、御縁がありまして皆様には善光寺海外派遣留学僧として勉強をしていただいたわけです。今後も善光寺は引続き海外に留学僧を派遣するつもりでおります。この育英会の基礎をつくられるのが皆様でございますから、育英会の発展のためにお力をいただきたいと思っております。

Sankiss

アメリカ・禅・センター報告

禅のブームは一時的なものではない

曹洞宗　河内　義宣

善光寺海外留学僧の第二期生として渡米して早くも三ヶ月が経過しました。まだまだ言葉にもなれず、日日のスケジュールをこなしてゆくことが精一杯といったところなので修学面の報告は後日送ることにして、今回とりあえず簡単にアメリカにおける仏教の状勢と、安居している道真寺のことを報告させていただきます。

一

昨年、ロンドンから『INTERNATIONAL BUDDHIST DIRECTORY』（世界仏教センター名鑑）なる小冊子が発刊されました。この種のものとしてはおそらくはじめてかと思います。

その序文に、次のように述べてあります。

「二十五年前には東南アジア諸国を除くと仏教センターを見つけることは非常に困難でありましたが、今や十九のアジア諸国と同様にヨーロッパ諸国、南北アメリカ、中近東アフリカ、オーストラリアなど四十四ケ国に仏教センターがあります。」そしてこの名鑑には六十三ケ国にある一八〇〇のセンターのリストがとりあげてあります。

これを見ただけでも、私達が手をこまねいている間

に、真摯な仏教者が国外に進出して、いかに仏教伝道に尽力してきたことか、また、世界の多くの人達が仏教に拠所を見い出そうとしているかがわかると思います。

内容はきわめて不完全のもののように思いますが、上座部仏教(小乗仏教)、韓国仏教の進出とともにチベット仏教の進出が目につきます。

これは中国によるチベット支配が大きく影響していることと思いますが、世界の人達の中にそれを求める動きのあることも否定出来ないところでありましょう。(私のいるニューヨーク州道真寺の近くにも大きなチベットの僧院があり、東海岸の多くの人達が集まってくるようです。)

次に今一つの大きな特長は、日本の禅(臨済・曹洞)が世界の各地にセンターを開設して活動していることであります。アメリカ(USA)についてだけでも約百ヶ所のセンターのうち三十が日本の禅関係のセンターになっています。一説には、米国には八〇〇の仏教センターがあり、そのうち二〇〇が禅関係だともいいます。こうした大きな数字の開きがあるだけでも、流動し、発展しつつあることがうかがえます。

とにかく、こうした世界的な仏教運動とでもいうべき大きな文化の流れの中にアメリカに禅が着実に根を下ろしつつあるのはまちがいないところであります。

さて、少し具体的な事例をあげますと、私達、道真寺の六人のメンバーは七月二日、大菩薩禅堂十周年の法要に招かれました。国際山大菩薩禅堂金剛寺は一九七六年の七月四日(アメリカ独立記念日)開堂になり、慶讃法要が営まれました。日本からは奈良薬師寺の高田好胤管長が一山の大衆と信者を同伴して随喜され記念講演を行われました。多くのアメリカ人の参禅者はもちろん日本の他宗の開教師の方達も列席された盛大なものでした。式典の最後に高田管長は玄奘三蔵の前後十八年にわたる求法の旅の話をされ、仏教が東漸し、それが今、太平洋をこえてアメリカに花を咲かせたと祝辞を述べられ、また、大菩薩禅堂の嶋野栄道老師は世界的な歴史学者アーノルド・トインビー氏の「将来、

歴史学者が集まって二十世紀とはどういう世紀であったのか議論した時、政治や経済や戦争のことではなく、仏教が西洋にもたらされたということが一番大きな意味のあることになる」という言葉を引用され、困難なことがあるとその言葉を思い出して禅の普及に力を尽くしていると挨拶されたのでした。

この大菩薩禅堂は、釈宗演、鈴木大拙、千崎如幻、安谷白雲といった先人の地道な弘法の努力を経て、三島市竜沢寺の中川宗淵老師の時、アメリカ第二の製鉄会社副社長ビル・ジョンストン氏（霊石居士）の力を得て一九七六年建立されたもので、臨済禅はニューヨーク州の山中、（注1）広大な自然の中にその基盤が造られたのであります。

一方、曹洞禅は従来日系人のためにあった桑港寺（サンフランシスコ）の第六世として赴任された鈴木俊隆師の時になって広くアメリカ人の中に教線が拡張されて、タサハラの山中に禅心寺（本格的な修行者の道場）を開山され禅の生活実践道場として曹洞禅の基盤が確立されました。

そして、今私のいる道真寺は、前角博雄老師（注2）の法系を嗣いだジョン・大道・ローリー師の道場であり、同じ会下のグラスマン徹玄師もニューヨークに禅センターをかまえておりますし、その他にもすぐれた人達が各州にちらばり禅センターを造っているのが現在の状況なのであります。

（注1）アンクル・トムズ・キャビンの著者で有名な Harriet Beacher Stow 夫人の住んでいた家のあるビーチャー湖はお寺のすぐ前にあり、その周辺一帯二百万坪が寺領である。ちなみに道真寺は二十四万坪の寺領をもつ。

（注2）曹洞宗黒田白純師の法を嗣ぐとともに原田祖岳―安谷白雲老師に学び、一方臨済禅を宇坂光龍老師より学ぶ。

二

私の安居している道真寺はニューヨーク市から車で二時間程北西のマウント・トレンパーにあります。も

とキリスト教の修道院を買いとったもので禅センターとして六年の歴史を持ち、指導者は前述のように大道師でありますが、山内の大衆の在り方は日本とはだいぶ違っています。実際にモンク（修行僧）としているのは数名（注1）で他は居士・大姉といったところで常に二十人位が修行しています。この寺のメンバーになるのには、この寺または他の場所でそれなりに弁道し、納得した人、つまり発心の人達ばかりで、メンバーとして認められるためには旦過寮に一日坐ることが義務づけられており、それから一年以上たって、本人の希望により授戒（注2）が行われるのであります。そして更に一年以上たって得度ということになりますから、坊さんになっている人は既に最低二年は修行した人達ということになります。

さてここでの修行のあり方ですが、三ヶ月間の安居期間が二回と、三ヶ月づつ二回の解制期間があるのは日本と同じですが毎月接心が行われており、修行者の機根に応じて公案禅、あるいは只管打坐が指導されています。制中の日常は暁天坐禅二炷、朝課、作務、日中諷経、作務、坐禅、晩課、夜坐と基本的には日本と全く同じであります。（解制中は日中諷経日中坐禅、晩課はなし）お経は般若心経、参同契、食事訓等、すべて英訳されたものを読み、大悲心陀羅尼、消災呪、延命十句観音経は日本と同じように読誦しています。そうした日常の中に朝晩独参（INTERVIEW）が行われ、修行者はそれぞれ老師の部屋に入り、個人個人具体的な指導を受けるわけであります。

日本と違っていることにサンデー・サービス（日曜礼拝）があります。（注3）この日は信者の人達が集まってきて、九時から三十分程のお経を読み、二炷の坐禅、（はじめての人の為には初めの一炷の間、別室で指導が行われます）提唱が行われ、碧巌録、無門関、伝光録などがよく話されています。

そして、特に道真寺は禅アート（芸術）を重視してWORK SHOP（研修会）、坐禅そのものの研究会の他に、お茶、お花、墨絵、空手などの関心のある人達

を集めてその研修とともに坐禅をさせています。そして参集して来る人達の寄附金や会費とが道真寺の経済をささえているようです。

こうして道真寺は日曜のたびごとに、あるいは研究会の度毎に次から次へと多くの人が訪れ、あるいは一週間とか一ケ月とか安居期間のみとか滞在して修行する人達もおり活気にあふれております。

最後にここで感じた大きなことの一つは、翻訳されたお経文や偈文が大変解りがよいということであります。お経というと解らないことの代名詞のように思われておりますが。

アメリカは人種のるつぼだといわれる程、多くの人種がおり、従って生活様式や価値観の違い、そして徹底した個人主義の国であることが大きな理由であると思いますが、本屋をのぞきますと、インド、チベット、中国、韓国、日本等の仏教書が沢山並べられており、多くの人達との会話の中からも感じられることは相当しっかり仏教を勉強した人達が禅に入ってきているように思います。そういう点からもアメリカの禅は決して単なる一時的なブームではないと思います。

（注1）日本のように檀家制度による財施はありません。また托鉢ということもございません。従って坊さんとして生きてゆく為には本当に精神的な指導者として自己を確立しなければなりまん。その覚悟がない以上、坊さんになれないのが実状であると思われます。

（注2）安居して一ケ月位の時、お授戒の儀式に参列することができました。四人の人が戒を受けたのですが作法は日本に準じたものですが、懺悔文にしろ十六条戒にしろ皆英訳されていますから解りやすいこと、そしてそれぞれの人に絡子と漢字による法名が授けられて、その意味を話して聞かせるといった具合で非常に感銘を受けました。

（注3）坊さんだけでなく一般の人達もすべて同じように立って礼拝をします。日本では在家の方達はそれをしませんが大いに学ぶべきところがあると思います。

中臣大原
宗善作

●海外留学僧当選論文

禅の国際化と私の役割

国安　大智
アメリカ・禅コミュニティ・オブ・ニューヨーク
（曹洞宗・秋田県・香最寺副住職）

奈良朝に伝来した仏教は、鎌倉時代に至ってはじめて庶民の仏教として真の宗教となった。

鎌倉時代の仏教は、禅と念仏にその教化形態が集約されたが、とくに禅はその後の日本文化にはかり知れない大きな影響を与えて今日に及んでいる。

この史的経過をたどるがごとく、日本の禅は東漸して、いまアメリカに開花している。

日本の仏教が、多数の北米移民をはじめ、白人に布教伝道を開始したのは明治三十年（一八九七）以降のことである。教外別伝、不立文字を標榜する禅は、教宗に立ち遅れ、曹洞宗についていえば、北米布教の拠点としてロスアンゼルス禅宗寺が建立されたのは三十年後の大正十五年（一九二六）である。

爾来、海外開教の先駆者磯部峰仙師をはじめとする先輩諸師の不惜身命の願行により、紆余曲折を経ながらも教線は逐次拡張されたが、不幸にも第二次世界大戦により一大頓挫をきたした。

戦後のアメリカは戦勝と豊かな生活、そしてテクノロジーの成功により、一時は優越感に酔っていた。し

かし反面、幾多の困難な問題に遭遇するとともに、人間性を無視し、人間を圧倒する文明社会のゆがみに直面し、人間の権威を回復し、客観世界の比重を軽くしてゆく精神の転換が求められるようになり、その要望にこたえるものとして、随處に主となるていの生き方を教える禅への関心が高まってきた。

こうした〝禅ブーム〟といわれるほどの禅への関心の高まり中で、日系社会とは独立して全米各地に曹洞宗、臨済系の禅センターが誕生した。

禅センターには二つの流れがある。その一つは、移民が護持してきた日本仏教を受け継ぐ日系米人のものであり、他は直接禅に結びついた日系以外の米国人のものである。

さて、日本語の通ずる一、二世の時代はとうに過ぎ去り、日本人といえども英語社会の市民となっている。したがって、いずれの場合も英語による布教でなければならず、その方法や内容も大きく変わらねばならない。日本の禅は日本の風土に育ったものであり、それがそのまま異質の土壌で伸びるわけではない。

そこで禅の国際化を推進するには、まずもって英語による布教可能の人材養成に具体策を講ずべきである。さらには、言葉が違えば思考も行動もパターンが違う。子供の時からそのパターンを身につけてこそ、それぞれの国民性が形成されるのである。したがって日本社会に育った者を開教師として送り込むだけではキメ細かい布教は困難であろう。それで、禅センターで育成された外人僧に対し、日本における修行の途を開くことが肝要であり、日本国内に海外僧を受け入れる施設を設けることが必要であろう。

かつてロスアンゼルス禅センター(前角博雄師主管)のグラスマン徹玄師が両本山に拝登して瑞世の式を済ませたとき、それを紹介した「ロスアンゼルス・タイムス」紙に、同紙の宗教記者チヤンドラ・ラッセル氏が「仏教が米国で生まれ、育った者によって語られ、導かれる時に、仏教は米国人にもっとも近くなり、理解される」と記したというが、至言である。日本に伝

来した仏教が、入唐、入宗した日本僧によって布教されてはじめて日本の土壌に逞しく成長したことを思えば当然のことである。

さいわいにして私は善光寺海外留学僧としてこころスアンゼルス禅センターに起居している。ここにはさまざまの過去・背景・国籍・を持った二百有余名の人達が協同生活をし、共々に坐禅に励んでいる。それらの人びととの職業は雑多であり、その生活ぶりは、禅センターで働く人もあれば、街での職場にでかけるものや勉学にいそしむ者もあるが、彼らは一様に、坐禅は独りでもできるが、真の修行には正師と、それに生活を共にする道友が不可欠であるとして協同社等を構成している。私はここにアメリカ社会に生きる叢林それは中国や日本における禅修行の原点を見るのである。

以上、アメリカの中での一禅センター内における見聞をもとに私見を述べたが、禅の国際化は今後急速に進展の一途をたどるであろう。私はここで学び得た知識と実践を生かし、禅の国際化に私の果し得るものは何かを模索し続け微力をささげたい覚悟である。

本誌の表紙絵及び挿画は、日本南画院副理事長・伊藤毡三郎建築研究所社長・善光寺檀徒総代伊藤毡三郎（三毡庵）先生の揮毫です。

仏の国スリランカに学ぶ

中野　良教

スリランカ国立ケラニヤ大学大学院研究所員（曹洞宗・東京都・東禅寺副住職）。写真はシャムユッテ派大僧正と共に

暑い国スリランカの朝は早く、日の出とともに人びとは村や町へと繰り出す。

コーランの唱和のひびきにも似た、パーリ聖典の声高らかな、そして崇高な続経が街々に流れる。そうした中を、粗末な荷車にキングココナッツを満載して、「デカイ、パナイ！」「デカイ、パナイ！」と、売り子が高声に売りあるく。スリランカの一日のはじまりである。

これは、スリランカにおける私の生活のはじまりでもある。

一九八三年、パーリ・テキスト・ソサエティ（P・T・S・ロンドン）の一員でもある、世界的に著名なパーリ語学者・ジャヤウイクラマ博士との出会いによって、スリランカで修行する尊い御縁をいただき、当時、博士が教鞭をとっておられた国立ケラニヤ大学大学院研究所に推薦を賜り、そこに通学するかたわら、僧院において、南方上座部仏教の僧として、日々の弁道にはげんでいる。

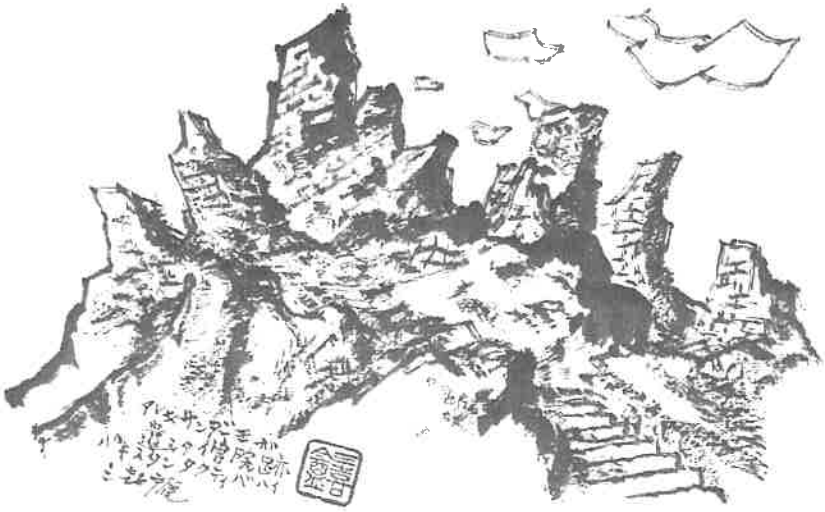
この間、三カ年、ただ無我夢中で経過したといっても過言ではない。それは、同じ東洋とはいえ、気候風土も違えば習俗文化も異なる、全く異質の環境であり、

特に想像以上にきびしいのが食生活だった。しかし、こうした生活を投げ出して帰国する気にはなれなかった。それは一体何なのか。私は自分自身に問い掛けた。

日々の生活にあっては、貧しい生活にあえぐ信者たちが、自らの貧しさをかえりみず財施をする姿だった。これは、エコノミックアニマルと蔑称される日本の社会では正に「未夢見在」「未夢聞在」のことである。また不幸にして病魔に冒された時は、安居同修の手厚い法愛があった。ここに私は難値難過の尊い仏縁に生かされている私を見出しさらにこの生活を続ける決意を新たにしたのである。

尊い仏縁に生かされて三年、いま私の周囲にはスリランカ内外の友人もふえ、まことに意義深い毎日を送っている。

スリランカは、仏教の世界における宗家的存在である。歴史的にみれば、釈尊入滅後、紀元前三世紀、アショーカ王の王子、マヒンダが仏教をこの国に伝えて以来、衰退興隆を繰り返しながらも今日まで連綿とし



てパーリ聖典及びその精神を伝え、また、中世以降には、ビルマをはじめ、タイ・カンボディヤ等の周辺諸国に仏教を伝播せしめた。さらに近世に至り、英国の統治を機縁として前世紀後半より英語によるパーリ聖典の研究が緒につき、仏教が欧米諸国に根を張る基盤となっている。

右のような歴史的経過により、最近においては、タイ・ビルマ・バングラディシュ・韓国等の近隣アジア諸国の仏教僧や仏教研究の留学生はもとより、欧米諸国の研究者や比丘としての実戦修行者の数も他の仏教諸国に比して一段と多いように観取される。

最近はまた、禅の教義や実践に興味と関心を示す当国人や欧米人に出会う機会が多くなり、禅の本場の日本人としての私を訪ねる人も少なくない。時には菩提樹の木かげやココナッツの林で共に坐することもある。正に「忝くも厚殖善根の良友に交わり、幸いに住持三宝の境界を拝す。亦慶快ならざんや」の感を深くしている今日このごろである。

最後に日本とスリランカとの仏教交流について一言すると、個人的にあるいは小団体レベルでの交流はたしかに活発になってきているが、残念ながらその多くは国際的な広い視野に立脚するものではなく、日本側の売名行為やエコノミックパワーによるものや、そしてスリランカ側の巧みな勧誘によるものが多く、目を掩いたくなる不祥事があり、また数多くのトラブルも発生している。その具体的には触れないが、その被害は、スリランカにわずかに残されている仏教文化や当国人の仏教によって培われた心の純粋性を蝕み、さらには、日本の国際感覚の欠如を暴露する結果となっておりそれは、日本の望ましい対外政策の歯車を逆行させるものであることは事実である。

さいわいにして私は当国に来て三年の歳月を送り、いささか当国の歴史的風土的事情を垣間見ることができた。さらに事情のゆるす限り当国にとどまり、見聞をかさね、日本・スリランカの仏教交流の望ましいすがたづくりに微力をささげる所存である。

インド留学記

プーナに学ぶ

東方学院講師
法政大学講師
阿部　慈園

はじめに

インド留学のために、日本を出発したのは昭和四九年十一月一日でした。それから、実に十二年の星霜が流れました。インドには、途中二、三回一時帰国しましたが、四年半滞在しました。インド留学生活は、わたしの青春時代を色濃くそして強烈に彩(いろど)ってくれました。インドは、わたしの学的基礎を、そしてわたしの思想的基盤のほとんどを、形成してくれたといってもよいほどです。今や、わたしの心の中で、インドは第二のふるさととなりつつあります。

このたび、善光寺御住職の黒田大圓老師から、「インド留学のことを『成寿』に書いてみては」というおすすめを頂き、インドで見たこと、聞いたこと、また考えたことを思いつくままに記してみようと思います。

留学の動機

東京大学大学院の修士課程では、北方アビダルマ仏

教（いわゆる小乗仏教）の文献を扱い、「倶舎論智品（くしゃろんちほん）の研究」と題する修士論文をまとめました。昭和四八年三月に博士課程に進学することが決まりました。指導教授や二、三の先生方から、「阿部君、パーリ仏教に転じたらどうかね」と勧められました。パーリ語は大学の一年のときから手がけていましたので、「はい」と答えました。

指導教授は「近ごろ、原始仏教やパーリ仏教を本格的にやる人が少なくなってねえ、君ぜひやりたまえ」といいつつ、二、三のパーリ語で書かれたテクストを示されるので、では本腰を入れてやってみようかという気になり、文献資料を集めはじめました。

そのころ、藤沢市の小栗堂というところでパーリ語の学習会がありました。門司に住むウー・ウェープッラ長老が講師で来ておられ、「これからパーリ仏教を研究してゆきたい」と話したところ、長老は「ではビルマへ留学したらどうですかー」とビルマ留学を勧めてくれました。

そのことを指導教授に相談すると、「君、ビルマもいいけど、インドはどうかね。プーナのバパットが日本人の学生を必要としているから、彼の仕事を手伝いながら、彼の下でパーリ仏教を研究したらよい。プーナ大学の博士課程に二年も在籍したら、論文提出資格が得られる。生活費の方は年五十万円として、二年間で百万円。お父さんとも相談してみなさい」と、今度はインド留学を勧めてくれました。

父に話すと、「費用のことは何とかするから、留学の話をお受けしなさい」といってくれ、永平寺の育英奨学生になるようはからってくれました。永平寺の奨学生になるために、故秦慧玉禅師や現監院鈴木祖光老師が御尽力してくれました。

入学手続きから渡印まで

翌四九年五月からプーナ大学への入学手続きが始まりました。入学願書や成績証明書などをインドへ送って、同年六月、プーナ大学から「貴君を一九七四年六月一八日付でプーナ大学サンスクリット科の博士課程の正規学生と認める」という入学通知書が届きました。

これを持ってインド大使館へ行き、ヴィザ（入国査証）を申請しました。七月一九日に申請受理してから、約三ケ月を費して、一〇月二二日に二年のエントリー・ヴィザを大使館はくれました。〔なお、現在は一年のヴィザしかくれず、インドで一年ごとに更新するようになりました。〕

同年十一月一日、多くの親しい人たちに見送られて羽田を飛びたちました。後で、母が目がしらをハンカチでふいていたと父から聞きました。わたしは、初めての海外、初めての飛行機でしたので、心はすでにインドに飛んでいました。

バンコックに四泊し、同月五日ボンベイ空港に降りたちました。光の祭り「ディワリ」のころでした。ボンベイに四泊し、九日にプーナ入りしました。まず、これからインドの師とあおぐバパット先生に挨拶にゆきました。

「P・V・バパット」と書かれた表札を見たとき、とうとうやってきたと思いました。石でできた階段を上っていくと、先生が部屋の入口まで出むいて、にこやかに手をさしのべてくれました。広い、大きな、あたたかい手でした。

ときに、バパット先生は満八十歳、小生は二十七歳でありました。

（つづく）

敦煌壁畫

第四次留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　アメリカ――ロスアンゼルス禅センター、タイ――ワット・パクナム

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する。

募集人員　3名（アメリカ2名、タイ一名）

提出書類　(1)　保証人と連署した願書
　(2)　卒業証明書（写）
　(3)　履歴書
　(4)　レポート（次項による）

提出レポート

一、アメリカ希望の場合
　(1)　禅の国際化と私の役割　　(2)　二一世紀の仏教と私の役割

二、タイ希望の場合
　(1)　タイの仏教に学びたいこと　　(2)　未来社会の仏教と私

希望国の中からいずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

インド留学記

魂の灯りの宗教の力強さ

東方研究会研究嘱託

保坂　俊司

はじめに

私が初めてインドを訪れたのは、祖父の遺言により遺灰をガンジス河に流すためでした。

祖父は亡くなる直前、枕許に私を呼び「お前はインド哲学を勉強しているのだから、インドに行きたかろう。俺の骨をガンジス河に撒いてきておくれ」そう言い残して不帰の旅路に就きました。

やがて、私は釈尊の遺跡を尋ね、そのつど分骨して祖父の希望どうり遺骨をインドの大地に返しました。

いくつかの遺跡を巡礼してましたが、8年たった今も忘れることの出来ないのが、ベナレスの街の対岸に昇る紅い太陽と朱に染まってボンヤリ霞む水浴場（ガート）です。

私は、小船を浮かべ紅を流した様なガンジスの水面に最後の一握りの遺骨を撒き、綿をしきつめた様な水面から静かに深い緑の水中へと潜むそれを不思議にも涙の一粒もこぼさず眺めていた自分を、今もはっきり思い出せるのです。その時私はようやく祖父の死をのりこえられたのでしょう。私はおじいちゃん子として育てられた為、祖父の死は、大きなショックだったのです。

そして、私はその時、またいつか必ずこの地に祖父を訪ねようと心に誓いました。

それが思いもかけず恩師中村元先生の御厚意と阿部慈園師の尽力により第一回東方研究会派遣留学生として、祖父の眠るインドの大地を踏めることになったのです。その喜びは尋常のものではありませんでした。

私の留学は首都デリーの郊外にあるデリー大学に籍を置きつつ、インドの現代宗教の現況を歴史を踏まえつつ研究することにありました。従って、私は留学中の二年余りを多くの人々に会い、色々な場所を尋ねることに費やそうと考えておりました。それは、インド人の中に息づく宗教をじかに体験したかったからです。

それは第一回目の旅行の時に受けた衝撃と驚きによって、すっかり現代のインドに魅了されてしまったからに外なりませんでした。

特に貧困や飢餓の暗黒の中、人々の心の中に燃え続ける魂の灯りである宗教の力強さに驚きをおぼえました。

それは我々日本人が物質文明の発達とともに、過去の世界に置き忘れてしまった人間性、つまり心の豊かさを示しているのではないかと思われます。

朝な夕な寺院に少しばかりの貢物を持って孫達の手を引いてお参りを欠かさない老人や、出勤前に必ず寺院にその日の無事を祈るサラリーマン、それがあたりまえのこととして行われているインドでは、神々と人間は一体となって相互に不一不二の協調関係にあるのです。

長くインドに居れば居るほど神様というものが不思議と身近になってくるのです。昔の日本でも村外れには必ず石の地蔵様や道祖神等があり、信仰という様な堅苦しいものではなくて、神仏は身近な存在だったと聞きます。インドでは今もこのような信仰が生きているのです。

あるインド人が「インドでは一年の内お祭のない日はないのだよ」と教えてくれました。確かに学校は休祭日が多く、加えて個人的な信仰から休講にしてしま

かがやいている時.

う先生や生徒も多いのです。人々は多くの神々をどれもこれも軽んずることなく崇めているのです。

ただ、残念なことに我々日本人が考えるほどに、仏教はインドの現実社会では親しみがあるわけではありません。

仏教の聖者のゴータマ・ブッダはヒンドゥーの神様の生まれ変わりと考えられており、仏教はヒンドゥー教の一派として、一般のインド人に考えられているのです。

したがって、特別に仏教を問題にすることはインドの人々にとっては余り意味のないことなのです。

二年余りの留学体験は、日本的常識である「インドは御釈迦様の生誕の国である」ということの否定からはじまりました。つまりインド社会との格闘は、根本的な私のインド観を粉砕することからはじまりました。

留学前の私のインド観は、一千五百年以上も前に書かれた仏教の経典によって形成されました。それはそれは美しく、清らかで全ての人々は善行を行うすばらしい人々の住む、いわば王道楽土そのものだと考えておりました。

私のそんなインド観は、しかしもののみごとに崩壊しました、それもデリー空港についた途端であります。

勿論、前回の旅である程度は心得ていたつもりでした。しかし、たった独人のインドでの生活の第一日から、立ち往生するとは思いもよらず、そうでなくても心細いことこの上ないのに、真夜中にただ独人空港の税関のカウンターに四時間近く足止めされ、その歓迎の荒っぽさに半ベソをかいていたことを今でも昨日のことの様におもえてなりません。

私は真夜中、ただ独人取り残された自分に、これから始まる、生活の運不運を考えて暗い気持ちに、思わず憂鬱になってしまったのでした。

私がようやく税関を通過した時には、インドの大地にあのベナレスで見た様な紅い太陽が顔を出しておりました。「神も仏もないものか」と心の中で呟いてしまいました。

（つづく）

禅と衣食住(2)

頭陀袋

東　隆真
（駒沢女子短期大学学監　教授）

頭陀袋――。

ごぞんじですか。

お坊さんが、ものを入れるために、首から掛けている袋のことです。

頭陀というのは、サンスクリット（古代インド語）のドウータ。

音訳して、杜多、沙汰、斗藪などの漢字を当てます。

意味は、我欲を除き、あるいは棄て、あるいは砕いてしまうことです。

そこで、お釈迦さまの時代から、仏教の修行僧が、衣、食、住において、できるだけ禁欲的な生活をおくることを「頭陀行」というようになりました。

「頭陀十八物」ということばがあります。

仏教の修行僧が、頭陀行を行うために必要な十八種の道具です。いわば、僧侶の必需品です。

お袈裟。食器。水を漉す嚢。楊枝。洗粉。水瓶。錫枚。手巾。小刀。ピンセット。火をつける道具。香炉。香匣。坐具。縄床。経典、律典。仏、菩薩の像など。

この十八物のなかには、日本仏教になると、「水を漉す嚢」（川で水を飲むとき、あやまって虫などを捕らえて殺生しないように配慮した袋）などは使わなく

なりますが、お袈裟、食器をはじめ、いまでも用いられているものは、たくさんあります。

また、「十二頭陀行」ということばがあります。

これは、仏教の修行僧が、我欲を捨てるために行う頭陀行を、衣、食、住のなかで十二種類に分けたものです。

一、静かなところで修行する。

二、つねに食べものを乞うて生活する。

三、食べものは、貧富の区別なく一律に乞うてまわる。

四、食事は、一日に午前中に一回摂る。

五、節度のある食事をする。決して食べ過ぎない。

六、午前中一回の食事のほかに、なにも食べない。

七、棄てられた汚い襤褸を拾って洗い、これを縫いあわせてお袈裟とする。

八、お袈裟のほかは身につけない。

九、墓地のそばに住む。

十、樹の下に住む。

十一、野外に住む。

十二、つねに坐禅する。横臥しない。

なかなかきびしい生活です。このうち、「二、つねに食べものを乞うて生活する」、「三、食べものは、貧富の区別なく一律に乞うてまわる」というのが、いまの頭陀袋と関連があります。

いまでも、禅宗では、表面に「大本山総持寺僧堂」とか「善光寺」とかしました頭陀袋を胸のまえに掛けて、「托鉢」をいたします。

托鉢は、要するに、食べものを乞うてまわることです。「乞食」といいます。

托鉢、乞食のときには、頭陀袋はどうしても必要になってまいります。いただいたものを入れなければならないからです。

私も小僧時代には、師匠と二人で、ずいぶん托鉢をしてあるきました。

学生時代にも、東京の世田谷、渋谷、銀座、浅草、上野など、あちこちの門口に立ちました。

絡子（らくす）の下に頭陀袋をかけます。托鉢、乞食のことを、頭陀行ともいいます。

この頭陀行の僧は、一見して、「乞食坊主（こじきぼうず）」です。

なるほど、乞食坊主にはちがいないかも知れませんが、もともと仏教僧侶の食べものは、乞食によっていただくのが正しいあり方です。

それにしても、托鉢の修行は、なかなか辛いものです。

一軒一軒の門口に立って読経していますと、ひとのこころの赤裸々なすがたに接することができて、けっこう楽しいのですが、それだけに、きびしい思いに直面させられることがしばしばあるものです。

しかし、托鉢の経験をもたない禅宗坊主などは信用できないというのが、私の持論です。

（読者のみなさん。

街かどで、托鉢の僧を見かけたら、どうか、お志を供養してあげて下さい！）

むかしから、お釈迦さまを「応供」ともおよびします。

羅漢さん（修行僧）のことも「応供」といいます。

応供というのは、供（食べものをいただく）に応ずる者（資格のある者）という意味です。

自分は、供に応ずる資格があるかないか。つねにこのことを念頭におきながら生きてゆくのが仏教僧侶の本分というべきでしょう。

このきびしい自覚と反省をもたずに、檀信徒のお布施をむさぼっているとすれば、それは、ただの乞食です。生活不能者です。

（こう書きながら、私自身、私のことばにおもわず、おそれおののいています）

ところで、頭陀袋は、僧侶がお袈裟を入れるときにも使います。

また、地方によっては、死者を葬る場合に、首にかけてやります。

また、三十三回忌を「頭陀円忌」ともいいます。

頭陀といえば、杜多という姓の人もいらっしゃいます。

さて、また、十年ばかりまえ、世界の各地にヒッピーの若者たちが群れていたとき、彼等は、頭陀袋をもっていました。私は、オランダで見たことがあります。

このごろでも、原宿などで、頭陀袋に似たバックを肩にかけて歩いているギャルを見かけることがあります。

なんでも無雑作に放りこめるから、きっと便利なのでしょう。

（駒沢女子短期大学学監、教授）

私の考える
太祖道と下化衆生

黒田武志
（大圓）

一

太祖様は誓願一筋に生きられたお方であり、また、夢を見、夢に生き、夢を実現されたお方であります。そして、人材の育成に力を致されると共に、まことに衆生縁の厚いお方でありました。

二

私は、二十五年前総持寺に安居して、太祖様のケタはずれの偉大さに深い感銘を覚え、太祖様に導かれて自分の一生を切り開こうと決意しました。

当時の私には、各宗派が分立して、大同団結することのない日本の仏教界は異常なもののように思えてなりませんでした。そこで私は、宗祖を通して釈尊に還ることを私の宗教活動の到達目標として設定し、その第一歩として、両本山安居ののち、仏舎利奉拝日本一周托鉢行脚をし、続いてインド仏蹟巡拝の旅にのぼり、帰途タイ国に立ち寄り、一年間上座部仏教を実地に学びました。また、四年前に新築した本堂を「釈迦殿」と命名したのも、宗祖を通して釈尊に還るという私の信念に基づくものであります。

さらに私は、縁あってアメリカに渡り、白人と共に

参禅弁道する機会に恵まれました。広く世界に学ぼうというのが私の夢であり、夢の実現に私は努力を続けてまいりました。アメリカから帰って、新寺を建立する夢が案外早く訪れたことは私にとってまことに幸いなことでした。新寺建立の機会に恵まれた私は、「檀家を敬うこと仏のごとくすべし」という太祖様の教えを肝に銘じ、また永平寺が禅苑としての規模が整うまでの十一年間にわたる太祖様の御苦労を偲び、寺院経営に微力を捧げ、開創十五年にして前記釈迦殿を建立することができました。

三

いまや人類は宇宙時代に入り、時間的にも空間的にも距離は著しく短縮され、世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望の危機に見舞われております。これは明らかに現代社会の悲劇であり、今日ほど仏陀釈尊の教法宣布を必要とするときはないのであります。

ところが、わが国は世界最大の仏教国でありながら、仏教界は遺憾ながら、世界の大勢に即応して教化の実を挙げる態勢に負けております。ここに私は、海外生活を通じて、広く世界に活眼を開く人材育成の重要性を痛感するのであります。そこで自坊開創十五周年を期し、報恩行の一端として、海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって仏教を振興し、世界の平和、人類の進運に寄与することをねがい、海外留学僧派遣育英会を設立しました。

そして昨年は、宗派をこえて、黄檗宗と浄土宗から、二人の青年僧をタイ国ワットパグナムに派遣し、今年は、浄土宗の宗侶一名をインドに、曹洞宗から一名をアメリカに派遣しました。

今後十年二十年と優秀な人材に海外留学の機会を与えることができたら、仏教の振興、期して待つべきものがあると確信し、努力精進する所存であります。ここに太祖様の大きな下化衆生の道が開けることでありましょう。（昭和六十一年六月九日、関東総和会大会―鳴川にて―において発表）

二つの月

佐藤 俊明

道路ぎわにある出版部の一室で休んでいたら、ゆっくり坂道を登ってくる人たちの会話が耳に入った。聞くともなしに聞くと……「ここは曹洞宗の大本山総持寺。いま一つの大本山は福井にある永平寺……」

誰だろう?と思って立上がり、垣根越しに見ると、それは門前で商店を経営しているM氏で、遠くから来たらしい数人の客を案内しているのだった。

「一宗に大本山が二つあるのはどういうわけかネ」

「ホラ、一軒の家にお父さんとお母さんがいるのと同じですヨ。永平寺がお父さん、こちらはお母さん」

「どっちが勢力強いのかね?」

「そりゃ、お母さんの方ですヨ」

M氏は自慢そうに答えた。

「じゃ、ノミの夫婦だナ……。して、この建物は?」

と、すぐ目の前にある鶴見大学の体育館を指さしてたずねた。

「何しろえらい精力のお母さんなんで、女の子ばかりの大学を経営してるんですヨ。開祖さまはこうして〝生めよふやせよ〟で大宗門をきずきあげたんですヨ」

「開祖はなんという人?」

「瑩山(けいざん)さまだ」

「道元(どうげん)さんは知ってるが、瑩山さんは知らんなァ」

「そうそう、どこのお母さんも無名なんですヨ。そこがまたえらいところで……」

なるほど!と感心して聞いた会話のひとこまだが、さて、その大本山総持寺開創に当って、瑩山禅師と一心同体の活躍をして、今日の宗門興隆の基礎をつくったのが峨山(がざん)禅師である。

峨山は、十六歳のとき比叡山に登って出家し、八年間、仏教学、特に天台の教学を修め、その蘊奥を究め

た。しかし、真の宗教的安心は学問仏教では得られないことを悟り、比叡山を下って瑩山禅師の会下に投じて禅の修行にはげんだ。彼は資性英敏にして筋骨逞しい偉丈夫で、見るからにたのもしく、瑩山禅師は、よき後継者に恵まれたことをよろこんだ。反面、峨山の、頭のよさを自負している様子、人をしのぐ高ぶりの態度には、心ひそかに案ずるところあり、〝いつか機会を見て〟と、時節の当来を待っていた。

冬の或る夜、月は中天に明るくさえわたり、山も河も、野も里も、清らかな月光に照らされ、えもいわれぬ美しい光景を描き出しており、身も心もそぞろに光に映徹するかのようであった。

瑩山禅師は、ふと思いついたかのように、

「峨山和尚、月に両箇（二つ）あることを知っているか？」

と、たずねた。

「しりません」

峨山にはなんのことやら合点がいかなかった。

返事をためらっている峨山を見て、瑩山禅師は、低いが、おごそかな口調で言った。

「月に両箇（りょうこ）あることを知らずんば、洞上（とうじょう）の種草となしがたし」（月に二つあることがわからないようでは、曹洞宗の禅法を天下に弘める第一人者と許すことはできない）

日ごろにないきびしい瑩山禅師の言葉に、峨山はかつて経験したこともない強い襲撃を受けた。そのとき、彼の脳裡に去来したものは――、

そのかみ、唐代の傑僧香厳（きょうげん）和尚は師匠の潙山霊祐禅師（前出『以心伝心』）から、

「お前は何一つ知らんこともないほど聡明博学だが、わしはお前が本で覚えたことには用はない。お前がお母さんの胎内を出る前、西も東も分らんさきのお前自身の一句を聞きたい」

といわれ、何か答えると、

「それは眼で見たこと」

「それは耳で聞いたこと」
「それは本で書いてある」
といって、潙山禅師はいっこうにうけあわない。困りはてた香厳が、
「どうか私のために説いてください」
と願うと、潙山禅師は、
「私が説くことのできるのは私の言葉であって、お前の一句には関係がない」
と、突っぱねる。
香厳は、これまで学んだ書箱やノートを取出して調べてみたが一句も見出せない。ぼう然自失した香厳は〝絵に描いた餅では腹はふくれない〟とて、本やノートの一切を焼き捨ててしまい、
「この世で仏法を学ぶことはあきらめよう。一箇の凡僧として生き、もうこれ以上きびしい求道の生活に心を労することはやめよう」
といい、泣き泣き潙山禅師のもとを去り、そして、南陽慧忠（〜七七五年）の遺跡をたずねて武当山に入り、禅師の庵のあったところ庵をむすび、その周囲に竹を植え、その竹を友として坐禅にはげんでいた。或るとき、道路を掃除していたら、箒のさきにあたったカワラのかけらが飛んで竹にあたり、カーチンとひびきを立てた。そのとき豁然として大悟した。そこで直ちに沐浴潔斉して香をたき、はるか大潙山を望んで礼拝して言った。
「大潙大和尚さま。あのとき私に一句を言ってきかせてくれたなら、今日の喜びはとうてい体験できなかったでありましょう。大和尚さまのご恩は父母の恩にもまさるものです……」
また近くは、徹通義介禅師が、この聡明利発がわざわいして、道元禅師に法を伝えてもらうことができなかった。

この瞬間から峨山の態度は一変した。
慎しみ深く大衆（修行僧）に一如した綿密な行持、きびしい坐禅修行。増上慢はミジンも感じられなくな

った。しかし、半年経っても一年経っても「両箇の月」の疑雲はさらに晴れそうもない。そして、三年の月日が流れた正安三年（一三〇一年）一二月二十三日、北陸の空には、寒月がすざまじいまでに冷たくこうこうとさえわたっていた。その月の光を浴びて静かに坐禅にはげんでいる峨山の姿を見て、その心境の一段と深まったことをはっきり読み取った瑩山禅師は、峨山の耳もとで指をはじいた。それはまことにささやかな音ではあったが、峨山には、三年間なやみ続けた大疑困を打ち砕く大音響にひびいたのであった。

「ああ、そうだ、このところだ！」

峨山には、月に両箇あり、といわれた瑩山禅師の心が、はっきり会得されのであった。

両箇の月。一つはいうまでもなく、中天にかかって澄みぬいている月であり、いま一つは、その月が光を放って地上の万物をあまねく照らしわたっている光のことである。それは　どれほど仏教教理に精通していても、それが日常生活に肉体化され実践化されて、喫茶喫飯から各自の仕事の上にまで、生活万般にわたってそのまま顕現してくるのでなかったら真のさとりとはいえず、したがって「洞上の種草となしがたし」という、峨山の心の底をうがった、瑩山禅師の鋭くきびしい指導だった。峨山は、この一つにして二つ、二つにして一つの関連するところを、今こそしはっきりとわがものとすることができたのである。瑩山禅師の教えの真髄にふれることのできた峨山の歓びと感激は、たとえようのない大きなものだったにちがいない。

このころから、瑩峨両尊の二つの月の光の一つ一つの輝きが国中を照らすにいたる、一心同体のめざましい教化活動がはじまるのである。そしてまた、瑩山禅師は、このころ、順々に月の光を受け継ぐように、お釈迦さまから永平二祖懐奘禅師までの仏祖の伝記と法の光の赫々たるさまを説示しておられた。それが、道元禅寺の『正法眼蔵』とともに宗門の二大宝典として有名な『伝光録』である。

大般若会拈香法語

六百金文尚未繙
祥雲瑞気満乾坤
総持良薬天甘露
利済衆生養道根

恭惟山門此日、身代不動明王祭之令辰、荘厳道場、謹請眼前此丘衆、転読大般若経六百軸金文、仰広大般若功徳力、諷誦般若心経、消災妙吉祥陀羅尼、慈救呪、所集功徳、奉供養、般若会上諸仏諸菩薩及十六善神、身代不動明王、一切護法諸天、当山土地合堂真宰、増加威光無量徳海

専　祈

仏法興隆、国家昌平、聖寿無窮、万民富楽

更　祈

山門繁栄、諸災消除、当山総檀家中、並十方信心外護者、大般若経寄付者各々家内安全、子孫長久、諸経満足、百事如意吉祥

至禱至禱

昭和六十一年五月二十八日不動明王大祭

大導師　佐藤　俊明老師

大般若会拈香法語

六百の金文、尚いまだ繙かざるに
祥雲瑞気、乾坤に満つ
総持の良薬、天の甘露
衆生を利済して、道根を養う

恭しく惟れば山門此日、身代不動明王大祭の令辰、道場を荘厳し、謹んで眼前の比丘衆を請し、大般若経六百軸の金文を転読し、広大般若の功徳力を仰ぎ、般若心経、消災妙吉祥陀羅尼、慈救呪を諷誦し、集むる所の功徳は、般若会上諸仏諸菩薩及び十六善神、身代不動明王、一切護法の諸天、当山土地合堂の真宰、威光を増加せる無量の徳海に供養し奉り、

専ら祈る

仏法興隆、国家昌平、聖寿無窮、万民富楽ならんことを。

更に祈る

山門繁栄、諸災消除、当寺総檀家中、並びに十法信心の外護者、大般若経寄付者、各々家内安全。子孫長久、諸経満足、万事如意吉祥ならんことを。

至禱至禱

善光寺だより

◆謹啓　梅雨の候となり、庭前のあじさいの色も雨空に鮮やかに映え、晴れ間にのぞく太陽もようやく夏の陽ざしとなりました。港南の成寿山におかれましては尊董山主様はじめご家族、諸学僧の皆々様も、いよいよご清祥の段、誠に大慶に存じます。

さて、先般は留学生と共に突然お伺いし、ご多忙中にもかかわらず、方丈様のいつも変わらぬ暖かいおもてなしと、慈愛あふれるご教導と励ましのお言葉を頂き、深く感謝合掌申し上げます。あの時お連れした中国（南京）の伴さんとビルマのルインさんの二人の青年は、日本滞在中のはじめての日本の仏教寺院の見学とあって、たいそう感激し、あの立派な和風陶器のお土産を頂き大喜びでした。故国に帰っても大切に飾って、日本の思い出にしたいと申しております。

あの時ご紹介申し上げた通り、伴さんは上海の師範大学で教育学を教え、ルインさんはラングーン市内の高校の数学の教師です。いずれも日本政府の招きで日本に教育研修に一年半の滞在で横浜国立大学で学ぶ国費留学生です。

弘明寺の留学生会館にはこうしたアジアからの留学生が百五十人寄宿しておりまして、私もよくそこに出向いてもう五年以上、テューターとしてお世話の奉仕をしております。今度おじゃましました二人の青年はいずれも、社会主義圏の出身で、前回ご紹介申し上げた二人の青年はタイ（ワナー）、マレーシア（アブサン）からの研修生でした。やはり、政治体制が似ると、互いに仲良くなるのでしょうか。

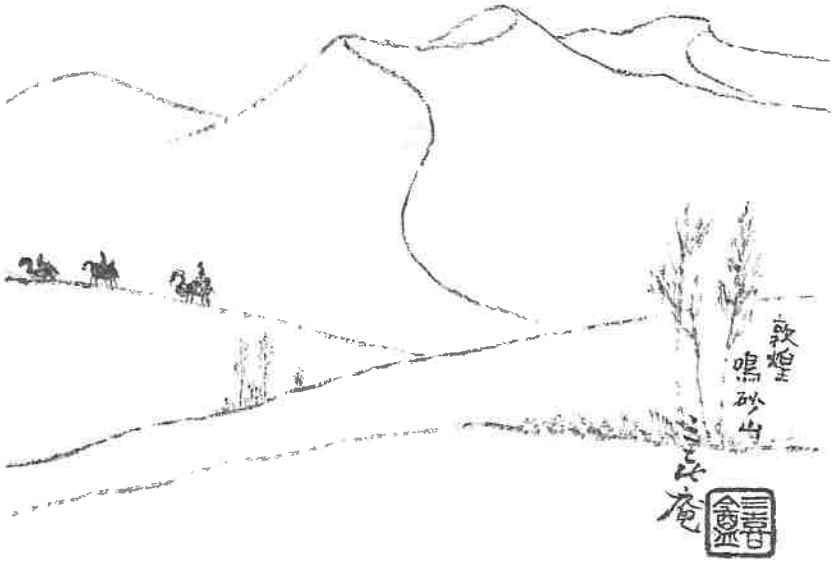
マレーシアのアブサン君はこの三月故国に帰りました。今、クアラルンプールの文部省視学官の仕事で活躍しています。ワナーさんは、方丈様も長く滞在修行されたタイの出身で、来年の三月帰国予定です。文部省の大学局というところに勤めているそうです。いずれも、その国のエリートで、帰国して立派な指導者になる青年達です。アブサン君が先月便りがありました。方丈様に、くれ

ぐれもよろしくお伝え下さいとのことでした。釈迦殿の荘厳さに打たれたとのことでした。

実は、彼は敬虔なイスラム教徒です。日本滞在中にあっても家族共に厳格なイスラムの教義に従い、礼拝や斉戒（断食）、喜捨（ザカート）といった戒律を固く守っているのです。あの三十日間のラマダンは、イスラム暦の九月ですが、その間、言行を慎しみ、黎明（れいめい）から日没まで、飲食、し好品、その他の欲望を一切絶ち、アラーをもっぱら念ずるという生活が営まれていました。その戒律の厳しさと布教・教化の徹底ぶり、そしてその生活がごく普通の教徒たちにごく自然に定着しているという点に改めて驚かされました。

先日うかがったビルマのルインさんも熱心な仏教信者で、毎朝、晩と三十分ずつ仏様に手を合わせ、瞑想することを、日課にしているそうです。東南アジアは様々な民族、文化、宗教が同居する国々で成っていますが、各々のグループに属する青年達は各々の宗教的伝統を尊重し、自分達の生活と心の拠りどころとして大切にしていることが彼らと交際してみるとよく分かります。ところで日本はどうでしょうか。

神奈川新聞（六月二十日号）の「横浜市民の宗教意識世論調査」によると、宗教を信仰している人は三分の一で、このうちなんと一八・四％が「新宗教」信者という結果が明らかにされています。これでも「第三次宗教ブーム」といわれる程関心は高まっているそうです。いずれにしても、日本人の宗教意識は極めて低く、信仰心ある者のほとんどが既成教団の名をあげてはいるものの、若い世代の多くが新興宗教、新・新宗教に魅かれている傾向が読みとれます。南区宮本町にある大山祇命神示教会は、神奈川新聞でその実態が連載されていますが、私も興味深く毎日これを読んでおります。あわせて、既成教団の動向を詳細に報ずる「中外日報」も毎回読んでいます。横浜の「神示教会」がなぜ青年層にそれ程強烈にアピールするのか、という問題は、既成教団がなぜ若者達を魅きつけないかという疑問と重な



り合うような気がします。

要するに、われわれ自身の布教、教化のあり方が、やはり彼らによって問われていると、私は考えています。

その点で、善光寺は方丈様が青年僧を海外に送り、現地の仏教をじかに体験してもらうという「留学僧派遣事業」は、十年、二十年先を洞察された仏教振興の方途を示されたものと注目されるわけです。まさに人材育成・教師養成は仏教の「百年の計」ともいうべきもので、二一世紀の国際化の時代を、先どりするすばらしい、プログラムがスタートしたと、喜んでおります。出来る限り、微力ながらお手伝いいたしたいと存じます。

今後も私は教育研究を続け、引き続き海外からの留学青年のお世話をするつもりですが、以上申し上げた課題意識をもってわが国の仏教伝道の使命を果たしたいと考えております。これからも、どうかご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。お礼とおわびをかねて、最近の所感を綴らせて頂きました。時節がら、ご自愛専一をお祈り申し上げます。

合　掌

国立教育研究所所員
興全寺住職　菊地　英昭

◆前略

詩一篇、同封いたしました。遅くなって申しわけありません。また過日は小松さんの葬儀に深いご配慮を賜りまことにありがとうございました。

〝明日世界が破滅するときまったらあなたはどうするか〟世界の破滅だからどこにも逃げ場がありません。私は即答できず迷いおののくでしょう。たとえば欲望のままに好きなことをするといっても絶望や恐怖などから逃れることはできません。

今の子供と昔の子供の決定的な違いは物質や文明の豊かさではなく今の子供は未来の果てに〝世界終末戦争〟を見ていることです、意識するしないにかかわらず。無意識のうちに核ミサイル戦争をみている子供の心の底にある絶望感をとらえなくてはトータルに理解できません。〝新人類〟と呼んでもなんの解決もありません。大人、子供を含めて〝世界の破滅〟が今にも現実となりうる心の状況にこたえるのが現代の仏法でありましょう。りんごの木を植えることは常識ではまったく無意味です。

海外留学僧は現代の仏法の一つの証であるといえます。ただ仏法を説くだけでは足りません。右にのべた心の飢餓にこたえる仏法は一つの実行によって説かれます。この実行が海外留学僧派遣制度の実施です。これこそはいま・ここ・われの現在に全力を投入して生きよという道元禅師の説くところであり現在の仏法の〝初転法輪〟だと思います。

明日世界が破滅するにしてもいつもと同じように生きていける〝平常心〟に少しでも近づきたいと願って

おります。未筆ですが、自分に出来ることでお寺に奉仕することは檀徒の当然のつとめですから原稿料その他についてご放念くだされるよう重ねてお願い申しあげます。

詩人　赤間　義徳

◆このたびは「成寿」と留学僧公募の資料を送っていただき、ありがとうございました。

私も六十年度一年アメリカに滞在し、この計画の重要さを認識することができます。そして、この計画が軌道に乗りましたら、次には外国から日本に仏教の勉強に来る人々のサポートが項載できればなどど考えてしまった次第です。

私も駒大の教員の一人として微力をつくします。御大願が成就してゆくことと法体の長養を祈念し、御礼といたします。

駒大教授　吉津宜英

◆「成寿」第五号をお送りいただき、厚くお礼申し上げます。充実した内容で感銘深く読ませていただきまして、第五号のハイライトは、博志様の得度のニュースだと思います。佐藤俊明老師のご祝辞のように「善光寺裡、春天の歓び」だと思います。健やかに成長され、次代の宗門をになって下さるよう心から祈ります。梅雨の季節を迎えますが、一層のご自愛を祈り上げます。

鶴見大学教授　角家　文雄

◆寺報ご恵与ありがとうございました。海外派遣留学という大学とか宗務庁とか本山でやる仕事を一寺院でおやりになるとはえらいことです。親ゆずり師匠ゆずりの寺に蟠居（ばんきょ）している時代に、よくぞここまでおやりになったと感心しています。

権大教正資格基準は「二寺創設、弟子十人養成とすべきだ」というのが私の持論です。近鉄奈良駅前の行基菩薩行乞像の前に、今奄美大島出身の坊さんが新寺創設の願いを立て十年の行乞をやっています。

ダラニ研究家　坂内　龍雄

◆拝啓　あじさいの眼にしみる候となりました。ご健勝のこととお喜び

申し上げます。この度は「成寿」夏季号のご恵与に預かりありがたく頂だい仕りました。毎号拝見したしそのご活躍の深さと広さとには常に敬服いたしております。なかでも海外留学僧派遣の大仕事に傾けておられるご熱意は誌面の隅々にも満ちており、頭の下がる思いがいたします。

本号ではご令息ご得度の写真を拝見いたし、成寿山善光寺が三箭（さんぜん）一束の実を示されたことに衷心よりお喜び申し上げるとともに、ご令息の一層のご多幸をお祈り申し上げます。

「仏祖の心」「燃え続ける芸術人生」からは仏心の豊かさと芸術理解への風姿を感得させて頂きました。不日新収蔵品など拝見の機に恵まれれば眼福の至りと考えております。取りあえず厚くお礼を申しあげます。

敬具

棚機後一日

東洋大学教授　廣島　一雄

◆涼風、微涼を覚える好季節を迎え、尊師愈々ご清々ご活躍慶祝申し上げます。ご発行の成寿前号に続いて夏季号をご恵送下されご厚志ありがたく、拝受、一字一頁を読誦させていただいております。

前号拝受の折にお礼も申し上げず申訳けなくおわび申し上げます。春来老妻病気入院療養中日々付添看護の為つい失念いたしお許しください。海外留学派遣の大事業の外、各方面に力をそそがれるご精進尊く感激い

たしおります。博志様得度至祝不尽です。愚僧も七十年前の得度が追憶されます迄に阿呆僧となりました。ありがとうございました。ご自愛下さい。

元本山維那　牧　寛　禅

◆拝啓　いよいよ梅雨入りとなり、大地も潤い、緑の精彩を放っております。ご一統様には、ますますご清栄のご様子まことにご同慶の至りに存じます。

このたびは、成寿第五巻のご恵贈を賜りまして、ありがとうございます。謹んでお礼を申し上げます。海外留学僧派遣の大事業を実践なされ、寺門の隆昌と飛躍を推進されるご尊公の行動力にただただ感嘆しております。

寺誌の成寿、内容はもちろんのこと、表紙カットに至るまで充実した編集振り、正に美術誌の趣さえ覚えます。

当庵のささやかな文庫の資料として、来庵者にも毎号読まれておりますことをここにあらためてお礼を申し上げます。

時候不順の砌、充分なご養生を祈念いたします。

右、お礼まで。　敬具

丙寅六月十九日

駒大一服会初代会長

西舘　宗龍

◆謹啓　梅雨の候貴海外留学僧育英会のご発展慶賀に存じます。

このたびは『成寿』第五巻夏季号のご恵贈を感謝申し上げます。私共協会の印度山日本寺諸事業と貴会の人材育成の尊いご事業は車の両輪の如く密接な関係を持っております。とくにカルカッタ大学留学僧の安井隆司師はたびたび印度山日本寺にも行脚され、その当選論文をなつかしく拝読いたしました。河内義宣師の求道の情熱にも心をうたれました。いま最も大切なことはこれらのすばらしい人材に十二分に活動していただける場を提供することです。仏恩報謝仏教興隆の志を同じくする同志として貴育英会の益々のご発展を念じ、当協会の事業に対しても格段のご指導をお願い申し上げます。時節柄ご自愛の程念じ上げます。

合掌

昭和六十一年六月十六日
財団法人国際仏教興隆協会
事務局　山口　賢

◆新緑に薫風の過ぎる天の佳時、尊師始めご一山皆々様にはますますご法光うるわしくご清祥の趣心よりお慶び申し上げます。貴刊成寿第五号をご恵送いただきただありがたき極み、心より厚くお礼申し上げます。

尊師・伊藤先生とのお出合いの妙を、そして燃ゆる志を抱いてアメリカにそしてインドに道をたずねる新に留学生に選ばれた二人の道人のご精進をお祈りするばかりでございます。ご自愛をお祈りしつつお礼まで申しあげます。

合掌
アジア研究所長　上坂元　一人

◆前略　「成寿」本日拝受いたしました。大荒様得度、おめでとうございます。また「善光寺、海外留学僧派遣育英会」大変なお仕事ではございましょうが、若いお坊様方がキッと山主様のお心を受けて、立派な実となっていかれることでしょう。

主人、ただ今カナダ・バンクーバーへ行っており九月末帰国の予定です。ブリティッシュコロンビア大学で「禅学入門」と坐禅をして来るようです。過ごしにくい季節、どうぞおん身ご自愛を。　かしこ

駒大教授　鈴木　格禪氏夫人

◆夏号贈って下さいまして、ありがとうございました。拝読するのがどんなに楽しいか、また、一つの教えを導いて下さるようでどの本よりすばらしいような気がいたします。今回特に禅と衣食住(1)の中で和服を仕立てている関係上とても興味深く読まさせて頂きました。最近の着物離れはひどいものです。なぜか？洋服の方が簡単で価格も安く仕立てる人があまりいず、動きが取れぬ……等々お召しになる場所も定まってしまったような気がいたしますが、たまに着ますと、日本人であると、誇りをもてる時でもあります。そして日本人の顔に一番会うお召し物だと思います。今日も一針一針ていねいに縫い上げています。

全福寺檀徒　高山　さつき

◆前略　先般春彼岸にはご経科のみお送り致しましたる所、お塔婆を態々墓地にお立て下され、ご配慮の程誠にありがたく御礼申し上げます。

成寿は五号誠に充実した内容にて、たやすく、ご参詣に上がれぬ私には方丈様のご法話は何よりありがたく心に泌みて拝見、また伊藤先生の談話は、先生のお人柄をよく了解し得て興味深く拝見いたしました。留学僧のレポート等に方丈様の遠大なご思慮の程の納得できまして遅ればせながら、善光寺護持費貧者の一燈ながら送金させて頂きます。成寿益々充実して参ります事を楽しみにおります。

善光寺檀徒　風岡　花子

◆謹啓　このたびは、「成寿」ご送本下さりたび重なるご厚情に心よりお礼申し上げます。

私事ながら、タイ留学その当時を顧みますに、誌上の留学僧のご発心、ご精進にはただただ頭の下がる思いで慙愧（ざんき）この上もございません。宗教、とりわけ仏教の求められている現在、少しでも社会に還元できますよう精進したく思っております。何せ非才この上もない身ですが、今後共ご法愛の程よろしくお願い申し上げます。

合掌

日本パクナム会員　渡辺　英俊

◆前略　初夏梅雨の候ご健勝にてご活躍のこと大慶に存じます。

このたび海外留学人材養成に意慾を専念せられている由、実に畏敬快哉の念に堪えません。海外から仏教求道のヨーロッパ系と多少連関のある小生にとっても今後の発展を刮目（かつもく）している次第で逆に海外からの留学僧に対してもしかるべき道が拓かれるよう望んでおります。この十月前角老師門下からも宗務庁主催の集会教育参加においでのことと存じますが。

秋田・東伝寺住職　成田　秀雄

◆謹啓　毎度「成寿」誌をご恵贈下さいましてありがたく厚くお礼申し上げます。はじめてお会いさせて頂

いてから、はや十五年にならんとしますが、この間のご発展ぶりにはただただ刮目（かつも〳〵）するばかり、心よりお慶び申し上げます。

おかげ様で私も元気に池上に通っていますが法華経を通して仏道をならっていますとどうしても「禅」に到達して参り、遂に去る五月下旬妻と共に車を駆って、加越能と旅をして、念願の永平寺及び総持寺祖院にお参りさせて頂きました。現地の風光に接して道元禅師・瑩山禅師を偲び、その感激の未ださめやらぬ時、貴台のご芳情に依り、今交流させて頂けますのはまさしく仏縁と感謝いたす次第です。いづれまた善光寺にもお参りさせて頂きます。　合掌

富士銀行部長　川村　隆信

◆謹啓

日頃のごぶさた申し訳けなく存じております。近日中にご気げんうかがいに参上せんものと存じておりましたところ、本日ごていねいに「成寿」夏季号をご送付下さり、誌中においてご子息博志様、得度なされた由を知りご両親様のお喜びもさこそと心よりお祝い申し上げます。

修行僧の前途は厳しくけわしい道と察せられますが、父上のご指導よろしきを得て必ずや大成されると存じ上げます。貴寺釈迦殿にての皆皆様方博志様の前途を祝す様を想い詩作致しました。詩作は生まれてはじめての事、詩の約束事、詩韻も知らず誠にお恥ずかしい限りですが、ご笑覧下さい。

瑞雲香煙充満堂　如来微笑拝衆生
春日霊光舞散華　歓喜読経響天空

博志様のご多幸祈念して止みません。

敬白

南無妙法蓮華経　合掌

㈱富士社長　阿久津経之

昭和六十一年六月十五日

◆「成寿」ありがたく読ませて頂きました。私の方の臥竜山頂の宝土日参のご祈念行もおかげさまにてずっとその後止むことなくつづけさせて頂いています。どうやらいつの間にか四年もすぎ三月から五年目に入りました。私にとっては先世からの深い因縁のものと思って今後も頑張って参らなければと心に決めています。

この頃は「仏恩を報ずるにてあら

ん」の修証義の一節がわが身のものとしてありがたく感ずるようになりました。

いろいろな意味のご参考にと思い資料一揃いを同封御送り申しあげました。お目を通して頂ければ幸と存じます。ご精進を遥かお祈り申しあげます。

合掌

六月二十三日

長野須坂市　桜井　幸男

◆梅雨を通りこし、さわやかな夏の日射しが目にまぶしい毎日が続いております。

方丈様、ご家族の皆様、お元気でおすごしのこととお喜び申し上げます。今回、成寿第5巻を拝読し、回を追うごとにその充実ぶりがうかがわれ、方丈様、そして編集スタッフの皆様の並々ならぬ情熱が伝わってまいります。また伊藤先生の絵、イラストも本を開くたびの喜びであり、感動であります。どうぞこれからも内容豊かな、すばらしい成寿が出来上がることを、そして少しでもお役にたつことができる様心から願っております。今後ともよろしくお願いいたします。

追伸

おかげさまでやっと一児の父となりました。これも皆様のおかげと感謝しております。外に出れる様になりましたらまたお伺いいたします。

神奈川新聞社出版局　斉藤　準一

◆いつもありがとうございます。益々隆盛であり、善光寺の活動、発展が、成寿夏季号で沸騰しており、たのしく拝読させていただきました。百五十冊の成寿は全国ナリス社員幹部と、ご販売者の一部の方々に配送させていただきました。今版は善光寺の隅々から、海外と宇宙的視野でまとめられており、伊藤先生と善光寺の関り、時期的に盂蘭盆会の解説など、欲しいもの知りたいことが見事に編集され、圧巻でありました。ありがとうございました。

ナリス化粧品　東郷　敏

御寄付御礼

海外留学僧派遣育英会ならびに「成寿」に、左記の方々よりご寄付をいただきました。心からお礼申し上げます。

◎海外留学僧派遣育英会

拾万円　静勝寺　高崎直道様
一万円　港南区　岡崎サカ工様
二万円　鶴見区　円光寺様
三万円　福島県　小池幸男様
拾万円　港南区　遠藤清勇様
二拾万円　〃　越石商店様
五万円　鶴見区　中央典礼様
拾万円　港南区　伊藤由之様
五万円　港南区　榎本実造様
三拾万円　松岳院　北川久憲様
五万円　港南区　湘南交通様
二拾万円　善徳寺　西山道樹様

◎成寿賛助

拾万円　港南区　伊藤由之様
五万円　勝国寺　実浄文英様
五万円　松岳院　北川久憲様

ご参加ください！

〝善光寺だより〟を今後、檀信徒の皆さま方の情報交換の場としても大いに活用していただきたく、皆さまからの投稿をお待ちしております。

心に残った出来事や随想を、思いのままにお寄せください。

巻末のハガキをお使いいただければ幸いです。

善光寺　出版部

昭和六十二年度年回早見表

一周忌	昭和六十一年亡
三回忌	昭昭六十年亡
七回忌	昭和五十六年亡
十三回忌	昭和五十年亡
十七回忌	昭和四十六年亡
二十三回忌	昭和四十年亡
二十七回忌	昭和三十六年亡
三十三回忌	昭和三十年亡
三十七回忌	昭和二十六年亡
四十三回忌	昭和二十年亡
四十七回忌	昭和十六年亡
五十回忌	昭和十三年亡

御先祖の年回供養はお忘れなく致しましょう。

昭和六十二年度成寿山善光寺行事表

◇行事	◇日時
新年祈禱会	1月10日(土)午前11時
節分会	2月3日(火)午前11時
開山忌	2月7日(土)午後2時
青年会総会	2月21日(土)午後2時
春彼岸法会	3月19日(木)午前11時・午後2時
花まつり法会(婦人会総会)	4月8日(水)午前11時
婦人会研修会	5月9日(土)
不動明王大祭　大般若法会	5月28日(木)午前11時
大施餓鬼法会	7月9日(木)午前11時・午後2時
盂蘭盆経(お盆供養)	7月10日(金)午前11時・(初盆)
光真寺参拝	7月13日(月)～16日(木)
医事・身上相談	7月23日(木)～24日(金)
秋彼岸法会	9月15日(火)午前11時～1時
七五三祈禱会	9月21日(月)午前11時・午後2時
お茶会	11月15日(日)午後2時
成道会	11月25日(水)午後1時～4時
写経会	12月8日(火)午前11時
参禅会	毎月第2土曜日午後2時
茶道教室(裏千家)	毎月第二日曜日午前6時
書道教室	毎月第1・第3月曜日午後1時
成寿発行	毎月第2・第4土曜日午後2時
	年2回発行不定期

編集後記

▲海外留学僧派遣育英会名誉顧問中村元先生（昭和五二年度文化勲賞受章者）よりの特別寄稿で本誌に花を添えていただき感謝にたえません。

▲留学僧は目下インドに安井隆同師スリランカに中野良教師、アメリカに河内義宣師、国安大智師、計四名が派遣され、それぞれ元気で精進しております。今年度はアメリカに二名、タイに一名派遣の予定です。ご希望の方は56頁募集要項をお読みのうえ応募してくださるよう、また不明の点は直接お問い合わせください。

▲毎号本誌のカットをたくさんご揮毫くださっている伊藤三喜庵先生の個展が、昨年十一月五日から十五日まで、横浜トーヨコビル・かなしんギャラリーで盛大に開催されました。四日夕にはオープニング・パーティが開かれ善光寺から方丈はじめ多数出席して祝意を表しました。なお、出展作品の最大傑作「十八羅漢」を善光寺に御寄贈いただき、檀信徒一同心から感謝しております。

▲善光寺は開創以来不動明王の御利益を蒙り隆昌一途を辿っておりますが不動明王の従者がおりません。せっかく御利益をいただいておりながらこれでは冥加が尽きるとおもいますので、今年は矜羯羅・制吒迦の二童子を制作勧請して十一月に開眼供養をおこなう予定です。

▲善光寺海外留学僧派遣育英会黒田理事長と佐藤常務理事の二人は、留学僧の激励と受入先への表敬訪問ならびに状況視察のため、春から夏にかけてインド及びアメリカに出張を予定しております。いずれ本誌を通して委細ご報告することとなるでしょう。

▲春の花見の時期に善光寺茶道教室が主催でお茶会を催す予定です。あらためてご案内申し上げますので、その節はご来寺くださるようお願いします。

▲本読の編集を担当している小熊由美さんのお母さんがご入院のため、小熊さんは郷里に帰っております。本号の編集いろいろ手抜かりあろうかと存じますが、右事情御賢察願うとともにお母さんの本復をお祈りします。

成寿　第六号
昭和六十二年一月十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

微笑かんのん

どんな苦悩も除いてあげると
あなたは誓ってくれました
この世に苦しみある限り
どこにでも居られると
あなたにめぐり逢いたいと
昨日も今日も歩き続けて
時にかすかな声を聴いても
吹き去る風が消しました
けれど微笑してみ手をさし伸べる
あなたのお姿は胸にきざまれています
何処で逢えるやら
今日も歩きつづけます
三十三処尋ねたら
必ず逢えると信じてます
その時の悦びを抱きしめつつ

遠藤太禅「観世音声を限りに」より

春光
横浜